

Title	東方におけるサーサーン式銀貨の再検討
Author(s)	桑山, 正進
Citation	東方學報 (1982), 54: 101-172
Issue Date	1982-03-15
URL	http://dx.doi.org/10.14989/66614
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

東方におけるサーサーン式銀貨の再検討

桑 山 正 進

はじめに

- 一 サーサーン式銀貨の出土情況
- 二 出土した貨幣の同定

三 東方におけるサーサーン式銀貨

- (一) 出土情況の検討
- (二) 出土貨幣の傾向
- (三) 埋藏年次と發行年次
- (四) 組み合わせと傳入時期

はじめに

マルク＝オーレル＝スタインはサーサーン銀貨をアスターナ (Astāna ア斯塔那) の墓で発見したが、東トルキスタンにおける多大の新知見のなかにそれは埋没して特に注目されなかった。しかし、この発見こそはサーサーン朝の貨幣が中國の境域で出土した最初のものである。ついで、第一次大戰後に組織された西北科學考察團の黃文弼は、トルファン (Turfan) の交河城北方で、あるいはクチャ (Kucha 庫車) のスバシ (Subashi 蘇巴什) 東都城においてサーサーン銀貨ないしその系統の銀貨を拾得したが、『吐魯番考古記』(一九五四)と『塔里木盆地考古記』(一九五八)において公表されたので、情報は第二次大戰後にもちこされた。その間に高昌都城イディクト＝シャフリ Idikut shahri において一九四六年ごろ二〇枚に及ぶ四世紀のサーサーン銀貨の発見があり、一九五三年にはこれと同種の二枚が採集され、さらに一九五五年には一〇枚が一括して方盒中より出土したのである。しかし中國境域におけるサーサーン貨の出土は、東トルキ

スターンのみにとどまらず、一九五五年には西安や洛陽、一九五六年には青海西寧、河南陝縣、一九五七年には西安張家坡でも出土し、これらを夏鼐氏はまとめて『考古學報』一九五七年第二期（のち夏鼐『考古學論文集』）『考古學專刊』甲種第四號、北京、一九六一年に所收）に報告した。そのうちこの種の貨幣の出土は増加の一途をたどり、近年報告された内蒙古フフホト（呼和浩特）の分までを数えると、一一七八枚という多量に達した。その内譯は、トルファン六三枚、クチャ一枚、カーシュガル Kashghar 九四七枚、河西以東の中國内部に及んだ數は一六七枚で、一括出土のカーシュガル九四七枚を除くと、トルファン以西で出土したサーサーン貨より中國内部で出土した量の方がはるかに多いという注目すべき情況となった。

この一一七八枚のなかには、サーサーン貨幣と認められながら、發行者である帝王を同定できないものが一四枚、殘缺六四枚、不明三四枚、計一一二枚が數えられる。殘る一〇六六枚の中には、サーサーン朝滅亡後にウマイヤ朝の東方域のアラブ＝イスラーム勢力が發行したサーサーン形式の通貨である、いわゆるアラブ＝サーサーン貨も含まれている。カーシュガルの鳥恰縣出土の九四七枚は、のちにのべるようにあらかたアラブ＝サーサーン貨であり、また中國内部においてもアラブ＝サーサーン貨やサーサーン貨仿製品を數えることができ、さらに稀な例としてエフタル貨をも含んでいる。したがって、ここで検討する貨幣はサーサーン朝帝王の發行にかかる銀貨、東方ウマイヤ朝貨においてサーサーン貨のダイを使用して發行されたアラブ＝サーサーン貨、およびサーサーン貨自身に自らの認印を後刻して通行させたエフタル貨の三種であり、これらをまとめてサーサーン式貨幣としたわけである。

完形品一〇六六枚のなかには、鳥恰縣の完形品八五〇枚があつて、その大部分を占めているが、發表された數は七枚にすぎず、のちにのべるようにその報告における分類は信用することができない（本文一三八頁）。そこで鳥恰縣の分だけは第三章の検討からひとまず切り離して今後の資料公表にまchたいと思う。したがって、殘る二一六枚の貨幣が検討の對象

となったが、そこにもなお寫眞・拓本ともに公表されていない分が一二四枚の多さにのぼっている。しかしその一二四枚については大部分が夏鼐氏の検討を経、王名の同定が既におこなわれている。その同定をいまかりに認めれば、二一六枚はみな貨幣の歸屬を考えることができ、これを手がかりにして分布状況を考慮することができる。

このようなサーサーン式貨幣の中國における出土に關し、その都度夏鼐氏の検討があり、一九七四年にはそれまでの一切の資料を使った「綜述中國出土的波斯薩珊朝銀幣」(『考古學報』一九七四年第一期)が發表されている。一方わが岡崎敬氏もはやくからこの種の貨幣の存在に注意し、とくに東西交通史の觀點からこれを編年に活用すべしという、注目すべき見解をとくに二つの論文において示している(「ササン・ペルシャ文化東傳の編年試論」『オリエント』第一一巻第三・四號、一九六八。「サーサーン・ペルシア銀貨とその東傳について」『西南アジア研究』一四號、一九六五)。筆者はこれから先學二氏の業績に夙に啓發されてきたが、從來の見解とは異った面を、發表された貨幣資料を整理し直すことによって、感じてきた。サーサーン式貨幣がサーサーン本土あるいはそれに直接かわる近い東方域で出土する場合は異なり、遠く中國の境域で出土すること自體が東西交通史においてほかの問題ではないのかもしれない。貨幣以外の物品とも當然からんでくる問題である。岡崎氏は上の論文のうち後者でそれを示唆し、また最近錦綾類などを含めた廣い視野に立つ整理を公表している(岡崎八〇、四七六頁以下)。

しかし、本稿では以上の貨幣だけに關し、その出土状況を調査し、公表分の貨幣自體をあたうるかぎり検討し直して分類をおこない、分布のあり方やセット關係を特に注意して、サーサーン朝にとっていわば遠東に當る地域にむかってサーサーン式貨幣が傳入したそのあり方を解釋してみたい。

一 サーサーン式銀貨の出土情況

出土地四七ヶ所におけるおのの出土情況は次のとおりである。出土地別に頭に付けた數字は表を含む以下の記述で出土地略號として使った。ただし、表ではアラビア數字になっている。

(一) 西安市西郊玉祥門外の西站大街の南約五〇メートルで、一九五七年八月に中國科學院考古研究所西安研究室が一基の墓を發掘した。版築の建築基臺が五〇×二二（メートル）の範圍を占めて残り、その下、地表面から六〇センチのところに墓室があらわれた。墓室は上端が約六メートルに五メートル、下底が五・五メートルに四・七メートルと狭い長方形で、南に墓道をつくって正面とする。長方形に加工した板石を組み合わせて石槨とし、これを墓室の中央に長軸に沿っておき、墓志は石槨の南邊に接し、他邊を塼でかこって置いていた。

墓志によって被葬者は、隋の大業四年（六〇八）に汾源の宮で九歳で病歿した李靜訓であり、墓の所在地が休祥里の萬善道場（萬善尼寺）であったこと、また埋葬が大業四年一二月であったことが判る。¹⁾

石槨の中には、石槨（一・九二メートル×〇・八九メートル、高さ一・二二メートル）があり、柱間三間、人字形束をもつ單層入母屋の建築形式をとる豪快な石棺で、内部に多くの副葬品が埋納されていた。副葬品には甬八四點や陶磁器二三點のほか、金製品一一點、銀製品一九點、銅製品一四點、鐵器五點以上、玉石器、骨、木、漆器、絹織物、紙、さらにガラス器二四點が含まれ、とくに金銀製品のうちにはラピス・ラズリやルビーなどを嵌めた金製頸飾や金釧がみられ、西方からもたらされた裝身具として注意を引く。問題のサーサーン銀貨一枚もそのようなものと同じ性格になった物品であり、棺内東側の北方、すなわち被葬者の右脚と棺壁との間にあった銅製平鉢にはいつていた。鉢にはこのほかに銀製の

琴の爪（指甲套）報告による）一〇個があった。この墓については最近比較的詳しい報告が公刊された（考五九A、四七一頁以降、專八〇、三一―二八頁参照。略號は本論末尾の一覽参照）。

(二) 西安市西南郊澧河西方の張家坡で、一九五七年四月に考古研究所西安澧西發掘隊が發掘した四一〇號墓から一枚のサーサーン銀貨が出土した（『考古學報』一九五七年第二期、六〇頁）。四一〇號墓はのちに張家坡一帯で發掘された墓の一連番號中に登記し直され、それによると二二三號墓に相當する（專六六、三頁の表）。一九五五年から五七年にわたっておこなわれた西安市周邊の客家庄、張家坡、洪慶村、郭家灘、韓森寨などの隋唐墓一七五基をまとめた發掘報告『西安郊區隋唐墓』（『中國田野考古報告集』考古學專刊丁種第一八號、北京、一九六六）によると、階段式墓道をもつた土洞墓の一基である。この墓の出土品としては瓶（I式に分類されている）・銅帶金具（I式に分類されたもの）、それにサーサーン銀貨が一枚が登錄されている。サーサーン銀貨が墓室の中でどのような位置で出土したものか不明である。ただしこの二二三號墓をふくむ一連の土洞墓には、開皇一二年（五九二）、貞觀一三年（六三九）、麟德二年（六六五）の墓志をもつものがあり、北周永通萬國錢、隋五銖錢、開元通寶などの錢貨を出土していることから、隋―初唐、六世紀末から七世紀末の墓葬と考えられている（專六六、二九頁の表、八八―八九頁）。

夏鼐氏がこの墓を隋墓としたのは（報七四、表一）、白鹿原墓葬中の第二〇號墓から出土している細頸壺（瓶？）が二二三號墓の瓶（I式）ときわめてよく類似しているからである。白鹿原第二〇號墓の墓形式は、白鹿原第四二號墓と酷似し、第四二號墓は、大業一一年（六一五）歲次乙亥十一月己丑朔一四日壬寅に白鹿原澧川郷に埋葬された劉世恭の墓であるという。

(三) 西安市東郊の韓森寨で、一九五五年十一月に陝西省文管委工作隊が發掘した隋唐墓地五五・〇〇七の第三〇號墓で二枚のサーサーン式銀貨が出土している。この墓に關することは一切發表されていない。夏鼐氏によれば、墓室内で開元

通寶・三彩壺（報告は罐）が出土しているという。彼は唐代初期、七世紀の墓としたが、八世紀前半に十分かかるものとする方が自然であろう（専六一、一二三頁）。

(四) 西安南郊何家村で、一九七〇年に一括一〇二三點の金銀器を中心にする遺物が、二つの甕と一つの銀製提梁壺に納められて出土した。甕（高さ六五センチ、腹徑六〇センチ）とこれに接してほぼ同じレベルに置いた提梁壺（高さ三〇センチ、腹徑二五センチ）がまず出土し、ついで第二の甕が第一の甕の北一メートルのところでボーリング探査により発見された。甕の型式は同じで、無頸で、底徑は口緣徑より小さく、口緣からすぐ肩となり、腹が張り出した形態をとっている。その大きさ、焼成、陶磁の別を問わないのなら、比較的多くの例がしられ、太原金勝村六號墓（『文物』一九五九年第八期）、鄭州上街區二五號墓（『考古』一九六〇年第一期）、朝陽韓貞墓（『考古』一九七三年第六期）で出土したものにみることができる。またボーリング探査によって多くのピットがあきらかにされ、そのピットからは大量の磚瓦が出土した。その中には、大明宮含光殿跡や興慶宮跡で出土した複瓣連珠緣軒丸瓦に近いものが認められる。何家村窖藏出土品中には、「淳安縣開元一九年（七三一）庸調銀」銘をもつ銀餅のほかは、自ら年紀をもつものがないが、上の環境からみて八世紀後半までの物品と考えてよい²。

金銀器とともに出土したサーサーン貨一枚は、甕の中にあつたものか、提梁壺の中にあつたものか、出土のあり方は一切發表されていない。貨幣はこのほかに「卽墨法貨」、鍍金の「貨布」、双面の「開元通寶」、「高昌吉利」などの銅貨、「和銅開珎」銀貨、ビザンツのヘラクリウス金貨が出土している。

(四) 長安縣王家庄公社天子峪の國清禪寺から南一〇〇メートルに立つ舍利塔内で、一九六五年に七枚のサーサーン貨が出土している。塔は五層の磚塔。高さ五メートル、塔基は一邊一・五メートルの方形を呈する小さいものである。その第三層中央に磚築の堅坑があり、そこに白磁鉢を埋納していた。白磁鉢にはもと鍍金の蓮瓣形の飾もので蓋がしてあつたと

いう。鉢内には銀盒（高さ五センチ、直徑五・五センチ）があり、その中にさらに小金盒（高さ一センチ、直徑一・一センチ）と小銀盒（高さ二センチ、直徑二・六センチ）とをいれ、七枚のサーサーン銀貨はそのうちの小銀盒にはいつていた。この塼塔には銘がなく、年代を明示するものがないが、報告にしたがうと、塼の斜行繩紋は西安地區における天寶以前（八世紀中葉以前）の唐墓に用いられた塼の紋様に多くみられ、一方白磁鉢は隋—初唐の磁鉢にきわめてよく類似しているという。天子峪は隋唐時代に梗梓谷あるいは便子谷といわれ、その西側に至相寺があったことが『續高僧傳』などにみえ、報告者はこの五層塼塔を唐代至相寺の舍利塔であるとしている。おそらくそうであろう（考七四、一二六—二七頁）。

(六) 陝西省耀縣照金公社寺坪で、一九六九年地ならし中に地表下二メートルにて舍利塔基があらわれた。塔基内には塔銘を刻んだ石函があった（高さ一・一九メートル、一邊一・〇三メートル、蓋の高さ〇・五二メートル）。石函の四周と上部は護石でおおわれ、その外側は塼を積んでかこつてあった。蓋の上面には、篆書の「大隋皇帝舍利寶塔銘」函蓋側面には線刻で雲に乗って向い合う一對の飛天とパルメット・花樹葉、また左右上端には日月(?)を配している。函の中央には深さ三三センチ、底部一邊四六・五センチをあけて舍利安置部とするが、厚さ一〇センチ、一邊五一・五センチの内蓋をその上の割りこみに置いていた。この内蓋上面に銘を刻んでいる。銘蓋をおいたレベルの函内面には二層臺ができるが、そこに「舍利弗」・「大迦葉」・「阿難」・「大目犍連」と記し、また石函外側に四天王・力士・獅子・花樹を香爐を中心として線刻している。

石函舍利安置部には、塗金盤頂の銅函（高さ一五センチ）を安置し、内に骨灰、舍利三片、金環一、銀環九、玉環一、隋五銖二七、サーサーン銀貨三があった。また銅函のほかに舍利安置部には、頭髮をいれた圓形銅盒、塗金方形銅盒、銅瓶、瑪瑙製品、三日月形銅飾、四、銅簪一、銅錐一、銅刀子一、その他があり、塗金方形銅盒には綠色ガラス小壺があつて、豊富な埋納品をもっていたのである。

銘は、この舍利塔が宜州宜君縣の神德寺において大隋仁壽四年（六〇四）四月八日に隋文帝の發願によって建立された靈塔、いわゆる仁壽舍利塔であったことを示している。³⁾この附近はこの石函の出土をまつまでもなく石佛や石佛臺座斷片がしばしば出土し、塔銘の記す隋代神德寺跡に比定することができるといふ（考七四、一二八頁）。

(七) 河南省洛陽市老城區の北郊である邙山麓で、一九五五年に河南省文化局文物工作隊が發掘した第三〇號唐墓から一六枚のサーサーン銀貨が出土している。この墓は長方竪井式の墓道をもつ、北向きの梯形平面の土洞墓で、墓室中央に東西に遺骸が並んでいた。副葬品はみな西側遺骸の頭部にあり、磁壺、陶小盒、磁小盒、銅小盒、銅鏡（畫象鏡）、磁盒、蚌蛤五、それにサーサーン銀貨であるという。サーサーン銀貨一六枚が、盒中にあつたのか、頭部に散在していたのかは、つまびらかでなく、墓の年代も唐墓というだけが示されたものの、正確には何世紀であるのか不明であるが、盒が多い點で、八世紀を下らないものとは言えよう（文六〇B、九四頁）。

(八) 河南省陝縣會興鎮の劉家渠で、一九五六年四月八日から同年一〇月九日までの間に黃河水庫考古工作隊は二二三基の墓を發掘した。サーサーン銀貨を出土した墓はそのうちの一基一〇三二號墓（劉偉夫婦墓）と名づけられた土壙單室墓である。墓室形式は方形で、奥に棺臺を置く。南側には、二つの天窗をひらいた斜行墓道がある。劉偉夫婦墓の東には弟の劉穆墓があり、そこでは鐵鏟一と隋五銖二を残すだけであつたが、兄偉の方には墓室東壁につけたひとつの耳室に多くの副葬品を残していた。武士俑二、鎮墓獸二、文武騎馬俑各一、銅鏡、隋五銖三一、鐵刀一、鐵刀子片一、鐵針一、銅葉陶壺一、金製指輪一、「始建國元年正月癸酉朔日製」銘をもつ王莽代の銅撮、それにサーサーン銀貨二枚である。この墓は盜掘にあつていたらしいが墓志は残り、それによると、兄偉は字睦儂、北周保定四年（五六四）に七一歳で死し、夫人の隴西の李氏は開皇三年（五八三）に六五歳で死んでいる。墓志はこの二人を開皇三年閏一二月に合葬したことを記している。弟穆は字が景諧、開皇四年（五八四）に八一歳で死し、夫人の太原の王氏はこれに先立つたが、開皇六年（五八六）に

合葬されている。したがってこの二基の墓は開皇三年―六年あたりの様子を伝え、五八〇年代のものとみてよい(考五七B)。

(四) 山西省太原市南郊一五キロの金勝村で、一九五八年四月に漢唐代の墓が発掘されたが、そのうち五號墓からサーサーン式銀貨一枚が出土している。墓は單面繩紋磚を積んだ單室墓で、奥壁(北)は直線であるが、東西兩側壁はやや外ぶくらみで、一邊約二メートルとし、天井は方錐形、南壁中央の墓門は天井を圓拱形とし、條磚をもって封じてあった。これから斜行墓道がのびていくが、墓室の床は條磚を小口に敷き、北半に高さ二六センチの棺臺をつくりつけ、奥に男、手前に女を仰臥伸展の形で置く。棺槨はない。室の西南隅には高さ一五センチの磚築による臺をつくり、漆盤・磁壺・陶燈・鐵片(長方形)をおき、また室の東南隅に墓志をおき、墓志の上にも陶壺一、俑片多數があった。棺臺の上、頭の上の方に陶壺・瓶・漆盒、女の右腿の外側に海獸葡萄鏡一面があった。男の胸および棺臺西北隅には、開元通寶一三と五銖一が散っていた。

磚臺上の漆盤はみな同じく圓形朱塗の同一型式で、一二個を一行四個で三列に並べていたが、女の頭の方の漆盒は直径三三センチ。中に銅小玉二六・黃色および白色のガラス小玉各一・扁圓形木製小玉二・楕圓形木製飾一・銅製リベット一・小形銅環一・鍍金小銅飾二・長方形小白玉石一・白色水晶片一・白色ガラス(?)を嵌めた銀製指輪一・栗石(白・青灰・淡紅)五七・小型白石鉢、およびサーサーン式銀貨一枚があった。

墓志は單面繩紋方磚を二つ合わせたもので、誌蓋は磨研した盤頂形で、胡粉で「罽(仙)君墓誌」と記し、斜面はやはり胡粉で唐草を描いている。誌銘には、「君諱祖。字仁。□平郡人也。……投節從戎……曾祖□楊公。祖□□刺史。父任京州司戶。……」とある分が比較的判りやすいが、その他は磨滅して讀みがたく、被葬者を割り出し難い。しかし、この墓室の東西北の三壁には三ミリの厚さで白泥を塗装し、一〇幅の壁畫を描いていた。この墓は墓志がありながら絶對年代を示すほど完全ではないものの、同じく太原市南郊の董茹庄新村五號墓の形式や壁畫と酷似する。董茹庄新村五號墓は

萬歲登封元年（六九六）の年紀をもつ武周趙澄之の墓である。このことから金勝村五號墓の年代も推定される。金勝村唐墓は少くとも六號まで存在するらしいが、その六號墓が八世紀中葉を下らないことはさきに(二)においてふれた。五號墓の年代は幅をとって七世紀末から八世紀前半とみられよう。

(三) 河北省定縣城の東北隅に版築の土壇がある。規模は東西一二メートル、南北二〇メートルである。一九六四年二月一四日にこの生産大隊がこの土壇を發掘した。中心の地下〇・五メートルまでは焼土、〇・五—一メートルでは北魏・西魏・北齊にわたる石佛斷片が出土し、それから南に寄った、深さ一・五メートルの版築土層の中で石灰岩の石函を發見した。それは盃頂形の蓋をもち、總高五八・五センチ、函深は一四・五センチ、函高三八センチで、六五センチに五七・五センチの長方形を呈していた。

石函内には地下水が浸透していたために遺物は原位置から動いていたらしいが、五六五七點という多量の埋納物をもっていた。主な物品は、金製薄葉五、耳飾一對・蓋を鎖でつないだ寶瓶一・環五對・嵌石の指輪二などの銀製品、鉢一・方形印章（「軍司馬印」「魏昌令印」など）三・匙三・鏡（五面、ただし一面一型式）五・鈴三・鏤三などの銅製品、また鉢一・瓶五・器底・環飾・玉など、それに青、綠、白色のガラス製品、玉石、水晶、瑪瑙製品もあった。これに加えて半兩錢三、五銖二二〇、貨泉二〇、大泉五十が四、小泉直一が二枚と、サーサーン式銀貨四一があり、貨幣だけでも二九〇點に達している。

石函蓋盃頂部に一二行の銘がある。それによれば、北魏太和五年（四八二）二月に孝文帝は東のかた巡狩して中山の新城宮に至り、ここで群臣に詔して州東の門顯殿の地において五級の佛圖を建立し、佛果を剋成せんことを願った。その年夏五月二八日に塔基は始めて成り、ここに以上の物品を石函におさめて埋納したのである。すなわちこれら一切の遺物は四八一年前半を下限とするものである（考六六B）。

(二) 内蒙古のフフホト市北西の頃口子村南西五キロにある城市跡で、一九六五年にサーサーン貨四枚が発見されている。この城市跡は東西一六〇メートルほど、南北一〇〇メートルほどの小規模なもので、漢唐の陶器片、半兩や五銖が表面採集され、川による浸蝕の崖面をみると下層が漢代、上層が唐代といわれる。サーサーン銀貨の出土地點は城内西南部。掘り出したときにも五銖や陶器片、唐代の獸面紋軒丸瓦や蓮瓣紋軒丸瓦が出、またサーサーン貨には絹織物の痕跡が残り、もとはそういったものにつつまれていたことが豫想される(考七五)。

(三) 廣東省英德縣浚洸鎮石墩嶺の八號墓で一九六〇年七月にサーサーン銀貨三枚が出土している。銀貨は朱塗木製盒中にもとはいつていた。盒はすでに腐蝕して分解し、斷片を残すのみ。銀環(釧?)・銀製小玉など裝身具も伴出している。盒中にこれらもはいつていたのかもしれない。

この墓に關しては從來その年代に關して混亂がみられるので、そのことを記しておく。發掘報告の記述が粗相で正確を缺くことに原因があるろう。二基の墓、六號墓と八號墓とをとりまとめて南齊墓として報告したところに問題がある。まずサーサーン貨を出した墓は、報告末尾の記述と八號墓の圖面とによって明らかに八號墓であることがわかる。六號墓ではない。この二基にまつわる紀年塲が二つ出ている。報告は「塲は皆長方形、長さ三二センチ、幅一六センチ、厚さ六センチ。側面に綾杉紋、『建武四年大國』、『齊永元年大歲己卯』をもつ」と言うのみ。二つの紀年塲が二つとも六號墓か八號墓のどちらかだけにあったのか、二つの墓に別々にあったのかをつまびらかにしていない。報告の序文に、「浚洸鎮郊石墩嶺の南齊墓は二座(そのひとつは永元元年墓)……」と記す。すると、ひとつには永元銘塲、他のひとつには建武銘塲があったことになるう。また、さらに報告の「小結」に言う。「墓六の(六號墓のこと)塲側に『建武四年』(四九七年)と『永元……己卯』(四九九年)の紀年があるから、この墓を永元年間の墓とすべきである。墓八はこの墓と並び、結構も出土器物とともに墓六と同じであるから、これも南齊墓とすべきである」と。

夏鼐氏は專六一の一二八頁において、一座(M_六)で「建武四年」塼、他の一座(M_六)でサーサーン貨を発見したと記し、のちに報七四の表一では、八號墓に永元銘塼があったとしている。また岡崎敬氏は、建武四年墓からサーサーン貨が出土しているとした(岡崎八〇、二六五頁表)。報告のどの記述を信用してよいか判りにくい現状では、一應八號墓を五世紀末六世紀はじめのものとみておくしか手はない。

(三) 夏鼐氏によると(報七四)、廣東省曲江縣南華寺の南朝墓で、一九七三年に九枚のサーサーン貨が出土したことは、『南方日報』一九七三年一月二五日紙上に報導されたい。墓の年代のことか、夏鼐氏が埋藏年代を五世紀とする以外は一切不明である。

(四) 青海省糧食廳が一九五六年に西寧市城内の隍廟街で建設工事をした時、七六枚のサーサーン銀貨が一括出土した。出土地點は永らく水漬きの低濕地であった場所で、出土當時の地形も周圍より低い。この低地の中の溝(一・五メートル幅)の斷面からサーサーン貨は出ている。溝の斷面には、地表から〇・八メートル―一・四メートルの間はやわらかい灰のような粉末がつまった小孔が多數見られ、の中には羊骨片が夾雜していた。サーサーン貨は地表下一・四メートルのところでは小型壺形土器にはいつてあったというから、ちょうどこの層が終ったレベルに位置していたということになる。しかし、壺がこの層から下へ埋められたのか、この層が形成される以前に埋められたのかは、記録されていない。壺は底徑が約一〇センチ、高さは一五センチ、蓋をせず壺の中はほぼ銀貨でつまっていた。他に開元通寶・貨泉を含む銅錢が二〇枚ほどあった。出土時の銅質には綠青がつよく出ていたが、銀質はわずかに灰色の銹があっただけで、光澤のあるものもあり、新品のようであったという(考六二)。

この一括藏を最初に報じた趙生琛氏は、銀貨は七六枚あり、うち四枚が殘缺であったという(考五八)。夏鼐氏もまたこの報告をうけている(專六一、報七四)。しかし、出土情況を目観した王丕考氏は、小壺の中のはほとんど大部分が銀貨

で、「估計在一〇〇枚以上」だと言ひ、これと別に銅錢二〇枚があったとしている（考六二、四九二頁）。岡崎氏も夏肅氏に従っているが（岡崎八〇、二六五頁）、正確な數量はあきらかになつていないのである。王氏の報告は趙氏の報告のあとに出ているが、枚數に關してはとりたてて趙氏の七六枚が間違つてゐるとも言つていない。ここでは七六枚＋アルファということに一應しておく。

以上の一四出土地が西寧以東の、いわば中國本土であるのに對し、以下(四)より(六)まではトルファン内部、(四)はそれぞれクチャ、カーシュガルに當る。

(四) カラーホージャ Qara Khoja 西南の都城跡（イディクト＝シャフリ、ダーキアーヌス＝シャリフ、Dakiānus Sharif 高昌都城跡） K^{11} 二〇枚が出土したのは、一九四六年ごろで、ウイグル老人が掘り當て、その後に新疆ウイグル自治區博物館が購入した。出土情態は、一括出土という以外に何もわからない（考六六A）

(四)と同じ都城跡の中の開墾地で、一九五五年春に農民により黑色方盒が發見された。發見を報告した李遇春氏によると、方盒は黑色膠質とされ、夏肅氏はガガタイト(?)としている（專六一、一一八頁、注一）。一邊一六・五センチ、高さ七センチの小型で、中央に七×八センチ、深さ五センチの方孔をひらき、それに見合う方形の蓋を附けていた。盒中には一〇枚のサーサーン銀貨が埋納されていた。出土に關する情報はこれだけであり、都城跡のどの地點、遺構など明らかにされていない。岡崎氏は方盒ということでストゥーパが豫想されると言つた。おそらく正しいが、サーサーン貨のほかに共伴物品があつたのか、なかつたのかも明白でない（岡崎八〇、二二八頁）。

(四) 二枚のサーサーン銀貨をやはりカラ＝ホージャ農業合作社員が「アスターナ古城」内の路上で收得した。「アスターナ古城」は(四)・(四)と同じ高昌都城跡のことと思われる（專六一）。

(四) スタインがカラ＝ホージャで入手（購入？）したとする貨幣にサーサーン貨一枚がある（Stein, II, p. 993, x,

d, 1)。

(㉔) 一九五六年秋にヤール＝ホトで新疆考古訓練がおこなわれ、交河城跡近傍の古墳が發掘された。その六號墓からサーサーン銀貨一枚が出土した。この發掘に關する報告はない。黃文弼は交河城近傍の古墳群として、溝北・溝西・溝南の三ヶ所をあげるが、これがそのいずれに當るかも不明（專六一、一二七頁。黃五四、九頁以下）。

(㉕) ㉔と同じ時に發掘された五六號墓からやはり一枚出土した。出土情況の不明であること同前（專六一、一二七頁）。

(㉖) 黃文弼が一九二八年にトルファンを踏査したとき、一古墓で一枚のサーサーン銀貨を入手した。黃氏は、開元通寶の解説において（黃五四、四八頁）、それがカラ＝ホージャの古墳の中で西域銀錢一枚とともに死者の口中にあった含錢として出土したことを記録している。その西域銀錢とはここでいうサーサーン貨であるが、その解説においても、これが開元錢とともに同じ死者口中に出たとしている（同、四九頁）。したがって夏鼎氏が、開元通寶とともに死者の口中より出たとするのは正しいが、雅爾湖 Yar Khotu 古墓出土としたのは錯誤であろう（報七四、表參照）。黃氏はカラ＝ホージャ（二堡）附近にある墓地として、高昌故城を基準に北西一里のもの、北東三里のもの、東約五里のものといった三ヶ所を掲げ、北西一里の墓地中に張懷寂墓があったとする⁹⁾。これが三堡村北に當るから、いわゆるアスターナの墓地であるが、當該のサーサーン、唐兩貨幣を出土した墓が、三つのうちのどこにあるかはわからない（黃五四、一一頁參照）。

(㉗) カラ＝ホージャの墓地 KM 八號墓（唐墓）で、一九六四年に死者の口に含ませて一枚のサーサーン式銀貨が出土している。カラ＝ホージャの墓地について夏鼎氏はアスターナの墓地と同じだとする（報七四）。

(㉘) カラ＝ホージャの墓地の KM 三九號墓（唐墓）から一九六九年に死者（男）の口中より一枚のサーサーン式銀貨が出土している（報七四）。

(㉙) アスターナ墓地Ⅰ區三號墓とスタインが名づけた墓から二枚のサーサーン銀貨が出土した。二枚の銀貨はそれぞれ

眼の上に置いてあった。三號墓は墓室奥に女性、手前に男性を、頭を南にして東西に並べ、女性の口にはビザンツ金貨仿製品一枚があり、面覆いには「花樹對鹿紋錦」斷片が使用してあった。二枚のサーサーン銀貨は男性の眼におかれていたものであり、やはりここにもサーサーン風紋様の錦を使った面覆いがあった。死體附近のアンペラや土とまじって、中央に方孔をひらいた銀製小圓板や隋五銖があった (Stein, II, pp. 646-47, 993; III, Pl. cxx, 18, 19)。

(四) 同じくスタインが調査したアスターナ第V區二號墓で、女性口中より一枚の銀貨が出土。腐蝕がすすみ正確な同定はできないが、大きさ、錢表の圖樣からあきらかにサーサーン銀貨であるという。ここにもやはり死體をおおっていた織物のうちにサーサーン風紋様をもつものがある (Stein, II, pp. 659, 994)。

(五) これより(四)までは、一九五九年一〇月から一九六〇年一月までの間にアスターナで發掘された四〇基の墓のうちの八基で、いずれもサーサーン式銀貨を出土した例である。そのうちのまず三〇二號墓 (中國における名稱はTAMが號數の前に冠せられている) から二枚が出土。夏鼐氏によると (考六六A)、I號及びII號女性被葬者の口中から別々に出土。この墓からは、二枚經斜紋對鹿錦・經畦紋對馬錦が出土し、永徽四年 (六五三) 墓志が年代を明示している (文六〇A)。

(六) 三一九號墓。サーサーン銀貨一枚。死者口中より出土 (報七四)。

(七) 三二二號墓。サーサーン銀貨一枚。死者口中より出土 (報七四)。二枚經斜紋大鹿紋錦・双鳥紋錦、及び龍朔三年 (六六三) 墓志出土 (文六〇A)。

(八) 三二五號墓。サーサーン銀貨二枚が死者口中より出土。小團花紋錦・猪頭紋錦 (相方とも二枚經斜紋)・顯慶元年 (六五六) の年紀をもつ文書を伴出した (報七四・文六〇A)。

(九) 三三二號墓。女性被葬者の口中より一枚のサーサーン銀貨が出土。大鹿紋錦・鸞鳥紋錦・麟德二年 (六六五) の年

紀をもつ文書を伴出（報七四・文六〇A）。

(三) 三三七號墓。墓室内の土から一枚が出土。鴛鴦紋錦・大鹿紋錦・騎士紋錦、顯慶二年（六五七）墓志を伴出（報七四・文六〇A）。

(三) 三三八號墓。墓室内の土から一枚が出土。乾封二年（六六七）墓志をもつ（考六六A）。

(三) 三三九號墓。墓室内の土から一枚が出土。經畦紋大吉錦および高昌延壽三年（六二六、武德九年）墓志を伴出（報七四・文六〇A）。

(三) 三六三號墓。死者口中より一枚が出土。連珠對鴨紋錦、儀鳳二年ト老師祈狀や同じ年の貸錢證文など四種の文書の廢紙を用いた紙靴一對、それに景龍四年（七一〇）ト天壽論語鄭氏注殘卷を伴出（報七四・文七二B）。

(三) 二〇六號墓。女性の眼上にて一枚が出土。この墓は永昌九年（六六九）に高昌縣の西原に葬られた張雄及び妻麴氏の墓である（報七四、岡崎八〇、四三九頁以下）。

(三) 一一五號墓。出土位置は不明。高昌末の墓と言うが、報告がない（報七四）。

(三) 一一八號墓。死者の口中より一枚が出土。墓は唐墓といわれるのみで、詳細不明（報七四）。

(三) 一四九號墓。女性の口中より一枚が出土。唐墓といわれるのみで、詳細不明（報七四）。

(三) 二〇號墓。女性口中より一枚が出土。神龍二年（七〇六）の文書を伴出（報七四）。

(三) 二九號墓。男性口中より一枚が出土。垂拱元年（六八五）の文書を伴出（報七四）。

(三) 四八號墓、女性の口中より一枚が出土。高昌延和四年（六〇四、隋仁壽四年）の衣物疏を伴出（報七四）。

(三) 七三號墓。女性口中より一枚が出土。その他不明（報七四）。

(三) 七七號墓。女性口中より一枚が出土。その他不明（報七四）。

④ 七八號墓。男性口中より一枚が出土。高昌延壽一五年（六三八、唐貞觀一二年）墓志をもつ（報七四）。

⑤ 九二號墓。女性口中より一枚が出土。高昌延壽一六年（六三九、唐貞觀一三年）墓志をもつ（報七四）。

⑥ クチャのスパシ東城において、一九二八年に黃文弼が表面採集した一枚（黃五八）。

⑦ カーシュガルの西方鳥恰縣より西、鳥魯克恰提よりさらに九キロ西の高さ九〇メートルほどの山崖下で道普請をした時（一九五九）、切り崩した傾斜面の石の割れ目からサーサーン式銀貨と金の延べ板が偶然出土。出土地附近には建築跡その他人工のものがなく、自然の場所に隠匿したものと考えられている（考五九C）。サーサーン式銀貨は九四七枚あった（報七四）。

二 出土した貨幣の同定

同定と検討をおこなう前に断っておかなければならないいくつかの點がある。さきにのべたように總數一〇六六枚中八五〇枚が鳥恰縣出土分のうち同定可能な枚數である。しかし、そこで公表された貨幣はわずかに八枚である。洛陽三〇號墓では一六枚のうち二枚しか公表されず、定縣の四一枚は八枚の公表、西寧の七六枚（？）は九枚が公表されているにすぎない。一括して多量に出土したものに限って公表枚數がすくないのは遺憾であるが、定縣の分はみな夏鼐氏が直接同定をしているのでまだしも全體をとらえることができる。西寧の場合は抽出した二〇枚によって平均重量が算出され、さらに調査された七六枚が二つの型式に分類されている（文六〇B・專六一）。したがって、公表された分についてはこまかく型式を定めることができるが、未公表の貨幣については、報告を信用し、これに従わねばならない限界がある。この限界を認めたとしても、鳥恰縣のものの分類からは、型式それぞれの枚數を信用することができないし、また⑦⑧のアス

ターナ墓出土のものでは、『新疆出土文物』（北京、一九七五）を検討するかぎりにおいて、夏鼐氏の同定について少なくとも一枚に疑問が生じよう（本文一六一頁、注六）。すなわちこの圖録中（一九三圖上段右）にアルダシール三世發行の銀貨と考えられるものがあるのに對し、夏鼐氏はみなホスロー二世としているからである（報七四、表五）。

寫眞または拓本で公表された分についても型式をさだめたいものがある。少くともサーサーン貨幣の場合、その型式を認定するためには、貨幣の表面 *obverse* と裏面 *reverse* とが公開されている必要がある。表面には独自の王冠を着用した王の右向き胸像があり、その面前である右端に王名または稱號をも明記し、左端に稱號（またはマークも）を示しているのが通例である。裏面には中央に拜火壇、その兩脇に祭司がいる。ある時點からその右端に貨幣の鑄造地を略記し、また左端に鑄造年次（王の登位年數）をアルファベットで示す。この部分が王名であったり、マークであることもあるが、一般に裏面はこのような表現になっている。表面の王冠その他の細部が王によって一型式以上の場合が多く、主にこれによって數型式の表面型式を設定することができるし、同様のことは裏面にも言える。そうすると表裏のいく通りかの組み合わせができ、これがサーサーン貨の型式となる。この型式は、ローベルト・ゲブル氏が數度にわたって試みた結果、編年を確定している³。そこで以下の同定も主として型式の面ではゲブル氏（Göbl 1971）に依據しているが、公表されたサーサーン貨の中に表面あるいは裏面だけしかないものがあり、この分については、以上の型式設定は不可能である。

以下前章の出土地の順をおって貨幣の同定をすすめてみよう。

(一) 隋李靜訓墓出土。ペーローズ *Phurs* 貨Ⅲ 1 式、一枚（圖 36）。ペーローズ貨の場合、表面はⅠⅡⅢの三型式、裏面も 1 2 3 の三型式。表面型式Ⅰをもつ貨幣は、裏面はみな 1 式ばかりである。Ⅱ式に對應する裏面型式には 1・2・3 の三型式がある。Ⅲ式に對しては 2 式は結びつかず、1・3 式ばかりである。Ⅰ式の王冠は半球狀の冠帽に連珠の冠帶をつ

け、冠正面に三日月、左右に城壁形をつけ、冠後部は無飾である。冠頂には三日月をつけ、その上にひだと三つの珠點を一單位とした紋様をもつ球形（コリユンボス）がある。球形と冠頂との間にリボンがある。Ⅱ式は後頭にも城壁形を飾り、球形も冠頂の三日月形もⅠ式より大きくなる。Ⅲ式はⅡ式に加えて鳥翼一對を冠頂にのせた。裏面はサーサーン當初の貨幣からつづく拜火壇と祭司とで構成されるが、ペーローズ貨からは拜火壇左右上方に六光芒星と三日月とがおのおの配置される。左右端、すなわち左の祭司の外側に王名または年數またはパフラヴィー＝アルファベットのMを記し、右の祭司の外側には必ず鑄造地を記す。したがって王名のあるものを1式、年數のあるものを2式、Mのあるものを3式とすると、Ⅰ1、Ⅱ1、Ⅱ2、Ⅱ3、Ⅲ1、Ⅲ3がペーローズ貨の全型式となる。

この墓のペーローズ貨は直徑二六ミリ、重量三・七グラム。報告によると、王冠の背後に城壁形（雉堞形飾物）はなく、そのかわりに一對の翼翹があるという（専八〇、一九頁）。これはあきらかに誤りで、城壁形は磨滅しているのである。城壁形が背後になく、鳥翼形がつくという貨幣はペーローズ貨はもとよりどんなサーサーン貨にもみられないところ。したがってこの貨幣の表面形式はⅢ。裏面は左右の文字が不鮮明。右端が年數だという報告も誤りであるが、讀めない。同様に左端を鑄造地名だとすることも誤りで、Ⅲ式の場合Mが見えなければ王名にはかならない。以上によってこの貨幣はペーローズのⅢ1式にあてうる。ペーローズ貨のうちⅠ1式貨はみな第一年、第二年の年數をもつものばかりがしられ、Ⅱ2式貨に第三年から第八年までの年數がしられている。第九年以上の年數を記す貨幣は從來しられていない。そこで上の二型式以外のペーローズ貨、すなわちⅡ1、Ⅱ3、Ⅲ1、Ⅲ3は第九年以後（四六七―四八四）である可能性がよい。

(二) 張家坡二二三號墓出土。ペーローズ貨Ⅲ1式、一枚（圖37）。夏鼎氏はこの一枚について「中國最近發現的波斯薩珊朝銀幣」（『考古學報』一九五七年第二期、六〇頁）の補記の中で紹介した。直徑二七ミリ。重量三・四グラム。夏氏は、裏面左側の文字を「左側的外面也有銘文、當爲紀年、模糊不能認辨。」としたが、年數ではなく、王名である。また表面

に關して、「正面王冠中間爲雉堞形飾……」とだけ記しているが、王冠の背後にも形式化した城壁形がみえる。

(三) 韓森塞唐三〇號墓出土。(1) ホスロー Khusrāu II 世貨 II 3 式、一枚 (直徑三二・五ミリ、重量四・一グラム) (圖 74)、(2) 仿製サーサン貨、一枚 (直徑三七ミリ、重量四・六グラム) (圖は專六一参照)。ホスロー II 世貨のうち、アレクサンドリア發行貨や特例發行の特殊な貨幣 (金貨が多い) を除くと、三型式が前代より引き續いた傳統型式をとる。表面は I 式と II 式があり、I 式はペーローズ貨 II 式以來ホスロー I 世・ホルミズド Hurmizd IV 世・ワルフラーン Varhran IV 世・ウィスターフム Vistāhm とつづいた型式で、冠の正面に三日月型、冠の兩側と後の三面に城壁形を、冠頂に球形 + 三日月のセットをもつ。また王胸像をかこんで二重連珠圈、圈外縁の三隅 (時計の三時・六時・九時の位置) に六光芒星 + 三日月のセットがある。

II 式は冠頂が異なる。ペーローズ貨 III 式ではじめて鳥翼 (ウルスラグナ鳥の象徴) 形が冠頂についた。以後鳥翼形は形骸化したかたちでつづく。ホスロー II 世貨 I 式までは球形 (本來はマゲの上にかぶった薄物のかぶりもの) が存續するが、II 式から六光芒星と交替する。このような球形と交替した六光芒星は、圈外三つの六光芒星と同じ表現をとっているので、冠の飾りものとみるか、圈外四隅に星を配したとみるか、意見のわかれるところである。外隅に星 + 三日月をおくことは、カワード I 世の第一年よりはじまり (五〇〇年ころ)、ホルミズド IV 世貨にあらわれ、ホスロー II 世で再び採用された。冠頂に星と三日月とおくことが實用の冠でも本當に使われたのかどうか、わからないが、少くとも貨幣上ではどのサーサン王冠にも三日月だけが冠頂を飾る例はない。

II 式の冠の冠帽が次第に低平となる傾向にあることは、言うまでもなく裏面に記す年數の順に貨幣を排列すればわかる。裏面は三重連珠圈をもち、外側四ヶ所に三日月だけをおくのが 1 式、表面と同じ星 + 三日月のセットをおくのが 2 式である。裏面 3 式は祭司の冠が 1 や 2 と全くことなるもの。

I式には1式が對應し、年数は第一年と第二年（すなわち五九〇―五九二年ごろ）だけがあらわれ、II式には2式と3式とが對應し、II2式では年数は第二年から第一〇年（五九一―五九九）までの数があらわれ、II3式では第一一年から第三九年（六〇〇―六二八）までの数があらわれる。またII3式には表面の三時と六時との間に銘 *AFID* が記される場合がある。

この唐墓出土の一枚は、裏面四隅に星十三日月のセットと三重連珠圈、祭司の冠は三日月形であるから裏は2式。表面はII式である。裏左の祭司の外にある文字を夏鼐氏は *PNJSI* (= *panj-sih* = 35) と読みきったが、最初の二文字は公表資料だけではよみにくく、*JSI* とよめるにすぎない。だが最後に *J* のくる一〇以下の数は *Panj* だけだから、夏氏の判讀は成功している。ホスローII世貨II3式で、六二四―二五年發行ということになる。

もう一枚が仿製であることは、公表資料が裏面であることによって明らかである。表面は打印したが、裏面は打印せずうらにおもての像がうつっている。夏氏によると、表面の紋様は粗く、ホスローII世貨以後の王像を祖型としているらしい。したがって發表されたごとく七世紀前半以降のものである。

四 何家村窖藏出土。ホスローII世貨II3式、一枚（直徑二九ミリ、重量不明）（圖73）。これに關する詳しい検討はおこなわれていない。表面の王像の右に王名 *khusrui* がようやく讀みとれ、左に *af*……をよむことができる。左側の銘は *afzātū* となろう。外縁三時と六時との間にある銘は *afid* で、ドーン以來これが王の第一一年以後の貨幣にしばしばあらわれることが確認されている (*Mélanges asiatiques*, III, 1859, pp. 513-518; Göbl 1971, Table XII)。裏面は祭司の冠が三日月形であるから3式であり、表面はII式だから貨幣はホスローII世貨II3式。裏の銘文のうち、右側の鑄造地は *ASP* か *AŠM* とおもわれるがはっきりしない。同様に左側の年数もはっきりしないが、最初の三文字は *PNJ*。次の文字は *DH* か *VIST* か *SH* のどれかに當るが、*DH* は字形の點で當らない。すなわち *VIST* か *SH* である。二

五年か三五年ということになる。現状ではどちらともきめがたい。二五年ならば、六一四—一五、三五年なら六二四—二五である。

(戊) 唐至相寺舍利塔出土。(1)ホスローⅡ世貨Ⅱ3式、六枚(圖69、71、72、75、76、78)。(2)ボーラーン *Burān* 女帝貨、一枚(圖81)。

(1) 六枚のホスローⅡ世貨Ⅱ3式のうち、一枚は半欠であるが、年数は *PNJVIST* Ⅱ二五(六一四—一五)とよめ(圖71)、その二(圖69)は *HFT*…までは讀め、次がはっきりしない。夏氏は *HFTVIST* Ⅱ二七(六一六—一七)としたが、Tの次の珠點になってしまった文字をVとみたからであろう。しかし末尾のTもその前のSも讀みとりにくい。これは直徑三二ミリ、重量三・六グラムある。その三(圖72)は直徑三三ミリ、重量四・一グラム。年数は *PNJSH* Ⅱ *panj-sih* Ⅲ三五(六二四—二五)である。その四(圖75)は *HFTSH* Ⅲ三七(六二六—二七)。直徑三三ミリ、重量四グラム。その五(圖76)はやはり第三七年がよめ、直徑三三ミリ、重量四・一グラム。その六(圖78)は *NUJS*…まで讀みとれるから、*Naj-sih* Ⅲ三九(六二八)であり、直徑三三ミリ、重量四グラムをはかる。

(2) ボーラーン女帝貨は直徑三二ミリ、重量四・一グラム(圖81)。表面の銘は *Burān afzūtū*。裏の銘のうち鑄造地は *SK*。左の年数を夏氏は「一」すなわち元年としたが、「一」である *AYUKI* とはよめない。*TLTA* すなわち「三」である。ボーラーンは六三〇年夏五月に登位し、一六ないし一七ヶ月の在位。ここで第三年というのは、六三〇年六月にむかえる新年までを第一年、六三〇年六月から六三一年にむかえる次の年までを第二年、以後を第三年とするからである(Paruck, pp. 117-18; Nöldeke, p. 433)。發行年代は六三一年後半とある。

(丙) 隋神德寺舍利塔基出土。(1)ペーローズ貨Ⅲ3式、一枚(直徑二七・五ミリ、重量三・八グラム)(圖38)、(2)カワード *Kavād* I世貨Ⅱ1式、一枚(直徑二九ミリ、重量四・二グラム)(圖58)、(3)ホスローⅠ世貨Ⅱ2式、一枚(直徑三二

ミリ、重量四グラム、(圖 62)。

(1) ペーローズ貨の裏面型式のうちで鳥翼冠をもつ表面Ⅲ式に對應するのは1式と3式である。1式は左外側に王名、右に鑄造地を記し、3式は左が王名ではなくて記號Mである。この一枚はⅢ3式に相當する。夏氏は、サーサーン中期以後の銀貨は裏面の外側に鑄造地と鑄造年代を入れるとしたが、早くホルミズドⅡ世(三〇三—三〇九)貨のあるものに拜火壇の柱にレーイー Rayi を表わす鑄造地名があり (Göbl 1971, p. 21) ペーローズ貨では即位年數をはじめて示している。そしてペーローズ貨ではⅠ式(冠の後側を無飾とするもの)に限って第二年を示す年數がみられ、Ⅱ2式に限って第三年から第八年までの年數があらわれている。さきに記したとおりである。この貨幣のようなⅢ2式に第二年を示す銘が夏氏の言うようにあるとすれば、サーサーン貨編年に對する根本的な見直しをせまる資料である。夏鼎氏の讀んだ裏面左端の文字は TRIN とはとうてい讀めない(考七四、一二二頁附記參照)。

(2) カワードⅠ世貨には特別な貨幣(金貨・銅貨など)を除くと四型式がある。表はⅠ—Ⅲ、裏は1、2で、Ⅰ1、Ⅱ1、Ⅲ1、Ⅲ2がその全型式である。Ⅰ1式は王冠がペーローズ貨Ⅱ式と同じで、裏(1式)の連珠圈が一重である。Ⅰ1式では第一年—第一三年の年數をもつか、まったく年數を記さないかである。Ⅱ式の冠はペーローズ貨Ⅲ式の冠の鳥翼形のかわりにリボンが上へひるがえたもの。そして連珠單圈の外三隅に六光芒星十三日月形のセットをもつ。裏面は1式で、Ⅰ1式の場合と同じであるが、年數は第一三年から第一九年までを數えることができる。Ⅲ式はⅡ式の要素に加えて王冠の前後に星をひとつずつ、兩肩の上に三日月ひとつずつをおく。これに對應する裏面型式のうち1式には第一九年から第三二年までの年數がある。裏面2式はⅢ式のみと組み合わせる。連珠二重圈である點が1式と異なる點で、これには第三三年から第四三年までの年數があらわれている。

このカワード貨は、王冠にひるがえるリボンがみえるのでⅡ1式か、Ⅲ1式である。兩肩に三日月、冠の前後に星があ

ればⅢ1式であるが、冠前方の星は判りにくい。そこで裏の年數をみると、夏氏は YAJDH (一一) と讀んでいるが、SJDH とも SHAJDH とも讀みうる。ただ一年と讀むと貨幣型式に合致しないこと、上記のごとくである。一三(五一一)も一六(五一五)もどちらもⅡ1式にあらわれてくる年數であるから、この貨幣をⅡ1式としておく。ゲブルによれば、第一二年と第一九年との間においては星が表面の左上に一個、第一九年以後は冠前後にあらわれることが通例であるという (Göbl 1971, p. 51)。だからこの貨幣の表面右上に星がみえなくても説明はつくわけである。この貨幣には外縁部四ヶ所にだいたい相對する穿孔があり、何か別のものに鋳留めしていたか、縫いつけていたか、あるいは同様の貨幣をつないで、装身具にしていた可能性が考えられる。

(3) ホスローⅠ世貨は特例を除くと三型式であるが、王冠型式はみな同じⅠ式ばかりでペーローズ貨Ⅱ式を襲用しているといつてよい。しかし、襲用しているといってもホスローⅠ世貨になると、冠帽の上に丈高い受軸がついて、その上の球形十三日月を支えるようになる。また受軸のまん中にうしろへなびくりポンを結び、冠の前後に星がひとつずつおかれる。前方の星は冠の正面の飾りものである三日月の上ののっかってしまった表現である。外縁の三隅は三日月だけで星はなく、連珠圏は一重。裏面は二型式あり、拜火壇の形態と祭司の形態で1式、2式がわかれる。この貨幣にみえる祭司は地に立てた長劍の把頭を両手をおいているから2式である。裏が2式ならば表は必ずⅡ式である。裏の年數ははっきり SJSIH (=三三) と讀め、五六三年に當る。穿孔二つがみとめられる。

(4) 洛陽邸山唐墓出土。ペーローズ貨。一六枚出土して、六枚が殘缺である。二枚だけが公表されていて(文六〇B、九〇頁)、この二枚については夏氏がペーローズ貨であることを認めている(專六一、一二八頁)。他の八枚は何王の貨幣かわからない。二枚のうち一枚はⅡ1式かⅡ2式で、裏面の左側の銘が王名であるなら前者、年數なら後者であるがはっきりしない(夏氏はこれをA式とした)。別の一枚はⅢ1式である。貨幣發行の年次は、Ⅱ1・Ⅲ1式が四六七年―八四

年で、Ⅱ2式は四六一年—六六年である。二枚に關する限りでは四六一年をさかのぼらない。

(v) 陝縣劉偉墓出土。ホスローⅠ世貨、二枚(1)直徑三〇ミリ、重量四グラム、(2)直徑三〇ミリ、重量三・九グラム。

(1) (圖63)はPNJ-VIST(=二五)とあって五五五年。(2) (圖64)はPNJ-HL(=Panj-chihl=四五)で、五七五年と夏氏はよんだが、はっきりしない銘文で、後者は最後の二文字をDH(=一〇)とよむこともできよう(專六一、一二二頁)。

(vi) 金勝村五號墓出土。アラブⅡサーサーン貨、一枚(直徑二九ミリ、重量三・七グラム)(圖87)。報告によると「鳥形の後刻」があるとする。公表された寫眞や拓本では圓形の後刻印はみえるが、その中にどういふ形の鳥形があるかわからない。鳥形というからセーンムルヴであり、こうした後刻はホラーサーンの鑄造地に集中している(Walker, p. cxlii f.)。ゲブルはあらゆる打刻印を分類して四群にわけたが、この類はⅣ類に相當し、その中で圓形中に鳥をもつものは、KM 1, 3 (a・b・c・d)、7、10、11A、11Bのいずれかに當る。この金勝村のような、時計の一二時と三時との間に打刻したものはホスローⅡ世貨に打刻したKM 10だけが残る(Göbl 1967, II, p.131, IV, T.10)。

報告によると(考五九B)、裏面の年數は一一である。そうするとホスローⅡ世貨Ⅱ3式となる。一一年の年紀をもつホスローⅡ世貨は3式ばかりだからである。しかし、3式の祭司の冠は三日月形があることをメルクマールとするのに、この貨幣にはそれがなく、背の高い冠帽である。だから裏面型式は3式ではなく、1式または2式である。1式は外隅に三日月、2式はそこに星十三日月をおく。この貨幣は三日月だけではないから2式ということになり、2式と對應する表面型式は必ずⅡ式であるから貨幣型式はⅡ2式である。この型式にあらわれる年數は第二年から第一〇年までである。一年という読み方は誤りである。

ウォーカーは、ホスローⅡ世貨式アラブⅡサーサーン貨にあらわれる年數はほぼヤズドガルド Yazdgarad 紀元(第一年—六三二年)で讀むべきことを説いたが(Walker, p. xxxvii)、『もしこれを認めるなら、この貨幣の年代は六三三年から

六四一年の間である。一方、ゲブルはヒジュラ Hira 紀元（第一年Ⅱ六二二年）だとする。これに従うなら、六二三年―六三一年となる。しかし、どちらの紀元をとるにしてもこのような早い時期にホラーサーンにアラブ勢力が及んだ形迹はなく、この貨幣はポスト・ヤズドガルド紀元（第一年Ⅱ六五二年）とみてもよかるう。そうならば六五三年から六六一年の間に貨幣發行の年代を考えることができる。

(二) 定縣北魏塔基出土。(1)ヤズドガルドⅡ世貨、三枚（圖33、34）。(2)ヤズドガルドⅡ世貨式エフタル貨、一枚（圖39）。(3)ペーローズ貨、三七枚（重量や直徑は考六六Bの表參照）（圖41―45）。公表されたのはヤズドガルドⅡ世貨が二枚、エフタル貨、ペーローズ貨五枚だけである。四一枚全部を検討した夏鼐氏によると、ペーローズ貨に二型式がある。ヤズドガルド貨（エフタル貨を含む）については特に言及していないので、一型式であるらしい。

(1) ヤズドガルドⅡ世貨の王冠は一型式で、前後左右四面に城壁形をつけ、球形は三日月によって冠帽と隔てられている。裏は拜火壇とその兩側に祭司がいるが、祭司は長槍または短槍をもつ1式と槍をもたず拜火壇に手をかざす2式とがある。このヤズドガルドⅡ世貨は、エフタル刻印をつけた貨幣の裏面が不鮮明で、1式か2式かきめがたい（圖35）。もう一枚（圖33）は長槍をもっているから1式である。縁邊を缺損した一枚は（圖34）、これら二枚と圖樣が異なり、連珠圈の直徑がことのほか大きく、圖樣も扁平である。この場合、裏は1式であるが、他の二枚とは拜火壇や祭司の表現において著るしい差がある。公表された寫眞はどうてい銘を読みとれるほどきれいではなく、かりにこれをヤズドガルドⅡ世のものとしておくけれども、前代ワルフランⅤ世貨の新型式である可能性も残されよう。また、ここにみる表現の差を鑄造地の差とみることもできるであらう。しかし、いまそれを検討する十分な資料は手元にない。

圖35をエフタル貨と斷定する根據は、縁邊に後刻された cursive Bactrian といわれる文字であり、S字狀のマークであるが、定縣出土貨にみえる文字もマークも、廣くそれを収集したゲブルの集成に拾うことができないので、これらは新

出の資料と言えよう (Göbl 1967, IV, T. 8f.)。

(2) 三七枚のペーローズ貨を夏氏は分類してAB兩型式とした。これらがそれぞれⅡ式とⅢ式とに當ることは前にのべたとおりである。Ⅱ式は三一枚、Ⅲ式は六枚であるという。公表分についていえばⅡ式は三枚、Ⅲ式は二枚である。それらについて以下に記しておく。

Ⅱ式のうち一枚(圖45)はMの記號をもつのでⅡ3式である。夏氏が T[SA] とよんだのは誤りである。またこの一枚の鑄造地を夏氏は UH としたが、NH であり、ニハーヴァンドであろう (Paruck, p. 185)。Ⅱ式の裏面に記號 M のない分には、みな王名か鑄造地を示す銘がある。残る二枚のうち一枚について夏氏は JPRDH (=chahardah 一四) とよんだが、前にふれたとおりペーローズ貨の年數は三から八までがしられ、九以上はない。そう考えて銘をみても最初の文字が讀みにくい、やはり PIRO[Chi] とみた方が穩當であろう。もう一枚は、夏氏の讀んだとおり ShTA (=shata 六) である。Ⅲ式の二枚(圖42、43)はともにⅢ3式である。

(二) フフォト出土。(1)カワードⅠ世貨Ⅲ2式、一枚(直徑二八ミリ、重量三・八グラム)(圖57)、(2)ホスローⅠ世貨Ⅱ2式、三枚(a)直徑二九ミリ、重量三・六グラム、(b)直徑三二ミリ、重量三・八グラム、(c)直徑三〇ミリ、重量三・四グラム)(圖五九一六一)。Ⅱ2式であるから第五年から第四八年まで、すなわち五三五年から五七八年までのものであるが、(b)の年數は最後の文字がHであるらしいがはっきりしない。(a)(b)については年數を確定できない。

(三) 英德縣南齊墓出土。ペーローズ貨Ⅲ1式、一枚(直徑二七ミリ、重量二・三グラム)(圖46)。他殘缺二枚。重量がいちじるしく小さいのは周縁が裏の連珠圈に沿ってきりとられ、またボタン孔狀に二個の穿孔があるからである。このことは殘缺二片についても同様である。裏の左側の銘は王名ペーローズであるが、右側の鑄造地はわからない。殘缺もやはりペーローズ貨であるが、型式を定めがたい。

(三) 曲江縣南朝墓出土。王名不明。九枚。報七四の表一(九二頁)に「皆剪半邊」という。同じ表で埋藏年代を五世紀とする。墓の年代を言ったものとする、南朝墓といっても東晉末から宋齊のものである。同時代のサーサーン王をあてると、第一二代ヤズドガルド一世(三九九―四二〇)から第一八代カワード一世(四八四、四八八―四九七、四九九―五三一)までで、どの王に當るかはわからない。

(四) 西寧出土。ペーローズ貨。前章でのべたごとく、出土枚数は一〇〇枚以上といい、七六枚といい、はっきりしないが、九枚の拓本が公表されているだけである。Ⅱ式が四枚(圖47―50)、Ⅲ式が五枚(圖51―55)ある。七六枚をしらべた夏鼐氏の調査によると、Ⅱ式が一五枚、Ⅲ式が六一枚であるという。同じくペーローズ貨を多量に出土した定縣の分はⅡ式が三一枚、Ⅲ式が六枚で、定縣と西寧とは型式別數量に逆轉がみられる點を注意したい。

公表分のうちⅡ式はみな裏面が3式であるが、一枚だけ1式あるいは2式がある(圖47)。Ⅲ式は三枚がⅢ1式(圖51、52、53)、二枚がⅢ3式(圖54、55)である(專六一)。

(五) 高昌都城跡出土。シャープール Shapur Ⅱ世貨・アルダシル Ardashir Ⅱ世貨・シャープール Ⅲ世貨一括二〇枚(寸法・重量については考六六A・二二二頁表を参照)。

(1) シャープール Ⅱ世貨。一〇枚(圖1―10)。Ia6a式に屬する。貨幣にみえるシャープール Ⅱ世の王冠は、前後左右に城壁形を飾る。城壁形の上に大きな球形がみえる。まげをつつんだ薄い布の上からまげの根本をリボンで結ぶ。城壁形の冠と別に鉢巻き(ディアデム)をしめている。後頭の結び目以外をリボンとしてひるがえらせている。以上が基本形であるが、城壁冠の下縁が連珠であるものとループ波状であるものがあり、その違いでIa式とIb式に分れる。ここにとりあげている冠は連珠があるからIa式となる。ゲブルは裏面を細かく觀察して七型式に分け、それを年代順に並べてみた。拜火壇の形式と祭司の冠、マークの有無による分類である。この貨幣の場合はゲブルの6a式に相當する

(Göbl 1971, p. 46)。5式までは拜火壇の火は簡単な炎だけの表現であるが、6式になると炎の中にアフラマズダーがあらわれる。右向きと左向きとがあり、右向きが6a式である。今問題にしている貨幣にみえるアフラマズダーはどれも右向きである。

裏面5式の拜火壇にみえるマークをゲブルは帝王敍任のしるしとみ、この貨幣をシャープールが一六歳に達した時点における記念発行と考えている (Göbl 1971, p. 47)。これにつづくのが6a式で、この型式は小ささまざまな貨幣の形で多量に現存し、サーサーン東方域で多く発行された形迹があることから、シャープールⅡ世の東方遠征に際した発行と考えられよう。東方遠征は三五七年までに終わっているので、この高昌都城のシャープールⅡ世貨は三五七年をさかのぼるものではない (Ghirshman, *Les Chionies-Hephthalites, Le Caire*, 1948, pp. 73-74)。

(2) アルダシールⅡ世貨。七枚 (圖15-21)。みなⅠ1式である。アルダシールⅡ世は冠を着用せず、球形と冠帽とデИАデームだけである。貨幣の裏面型式は拜火壇に炎だけがあるもの (1式) と炎の中にアフラマズダーの右向きの胸像のあるもの (2式)、および拜火壇だけのもの (3式) の三種であり、この高昌都城のものは七枚とも炎だけの1式に属している。

(3) シャープールⅢ世貨。三枚 (圖29, 30, 31)。シャープールⅢ世貨にみえる王冠は、いわゆるアーケードⅡタイプであり、アーチを列ねた上開きの冠で、アーチの内側に三葉形を配するのが普通である。これには形式化してしまってアーチと三葉形がいっしょになり、縦線ばかりをつらねるようになったものもあるが、高昌都城出土のものはみなアーケードⅡタイプであり、くずれていない。裏面には四式があり、アルダシールⅡ世貨の裏面の三つの型式と同じ手のもののかに、敍任マークのみをもつものがある。この貨幣は、二枚が炎の中にアフラマズダーを表わした型式で、貨幣としてはⅠ1式 (圖30, 31)。一枚だけが炎だけの型式で、Ⅰ2式 (圖29) である。

銀貨の出土地別型式一覧

Pirōz (457-59-84)	Zāmasp (479-99)	Kavād I (484, 88-97, 499-531)	Khusrau I (531-79)	Hurmizd IV (579-90)	Khusrau II (590-628)	Būrān (630-31)	Yazdgard III (632-51)	Arab-Sāsān (651→)	不明貨数	備考	出土地番 号	圖 (本文165—172頁間)
III1 III1					II3 (624) II3 (614, 624) II3 (614, 616?, 624, 626, 628)	I1 (631)				仿製1枚	1 36 2 37 3 74 4 73 5 69, 71, 72, 75, 76, 78, 81 6 38, 58, 62 7 39, 40 8 63, 64 9 87 10 33—35, 41—45 11 57, 59—61 12 46 13 14 47—50	
III3 II 1/2・III1		II1 (512/615)	II2 (563)					Khusrau II (653~61)		穿 孔 残欠6を含む		
II・III		III2 (520/530)	II2 (538/578)						9	穿 孔		
III1 II・III												
					II2 (596?) II2 (600) II2 (596?) I1 (579)			Khusrau II (651)	1			15 1—10, 15—21, 30, 31 16 11—14, 22—26, 32 17 27, 28 18 19 67 20 68 21 70 22 23 24 65, 66 25 26 83, 85 27 28 29 30 31 32 79 33 34 84 35 36 37 38 77 39 40 41 56 42 43 44 45 46 86 47 88—96
					II3 (622) ○ (?) II3 (619) II3 (626) II3 (619) II3 (619) II3 (614) II3 (626) II3 (622) ○ (?) II2 (590) II3 (619) ○ (?) ○	I1 (632)	Yazdgard III (651)	II2 (635/651)	1 1 1 1	剪 邊 穿 孔 剪 邊 穿 孔 鑲金・穿孔 鑲金・フック		
III	I1 (498/-99)					I1 (630/-31)		Khusrau II (659-70) ○				
136	1	2	6	2 (No. 47を除く)	25 (No. 47を除く)	2	2	4 (No. 47を除く)	29 (No. 47を除く)			

表1 サ ー サ ー ン 式

出土地番 出土地	出土 年次	遺跡性格	出土状態	遺跡年代	出典	出土 総数	Shāpūr II (309-79)	Ardashir II (379-83)	Shāpūr III (383-88)	Yazdgerd II (438-57)
1 陝西西安玉祥門外	1957	隋李靜訓墓	銅鉢内	大業4=608	考59A・専80	1				
2 〃 西安張家坡	1957	隋唐213號墓	?	6世紀末-7世紀初	専61・専66	1				
3 〃 西安韓森寨	1955	55-007-30 墓	?	8世紀前半	専61	2				
4 〃 西安何家村	1970	金銀器窖藏	?	8世紀中葉	考72・文72A	1				
5 〃 長安天子峪	1965	唐丞相寺舍利塔	白磁鉢内銀盒	7-8世紀	考74	7				
6 〃 耀縣寺坪	1969	隋神德寺舍利塔	鍍金銅盒	仁壽4=604	考74	3				
7 河南洛陽邙山	1955	唐30號墓	頭部上方	8世紀?(下限)	文60B・専61	16				
8 〃 陝縣會興鎮	1956	北齊劉偉夫婦墓	東壁耳室	開皇3=584	考57B・専61	2				
9 山西太原金勝村	1958	唐5號墓	漆圓形盒	7世紀末	考59B	1				
10 河北定縣城内	1964	北魏五級佛圖	石函	太和5=481	考66B	41				
11 内蒙フフホト	1965	城跡	絹袋?	唐?	考75	4				
12 廣東英德浛洸鎮	1960	南齊8號墓	塗朱木盒	5世紀末-6世紀初	考61・専61	3				
13 〃 曲江南草寺	1973	南朝墓	?	5世紀(?)		9				
14 青海西寧薩爾街	1956	?	小壺内	(開元通寶伴出)	考58・考62・専61	76+				
15 Turfan Qara Khoja	1946?	高昌都城跡	?	?	考66A	20	Ia6a	I1	I1・I2	
16 〃 〃	1955	石方盒	石製方盒	?	考57A・専61	10	Ia6a	I1	I1	
17 〃 〃	1953	〃	表面採集	?	専61	2				
18 〃 〃	1915	?	收集	?	Stein	1				
19 〃 Yar Khoto	1956	Yar Khoto 6號墓	高昌麹氏代?	?	専61	1				
20 〃 〃	〃	〃 56 〃	〃	〃	専61	1				
21 〃 Qara Khoja	1928	墓	死者口中	(開元通寶伴出)	黄54・専61	1				
22 〃 〃	1964	KM 8號墓	〃	唐	報74・文73	1				
23 〃 〃	1969	〃 39 〃	〃 (男)	〃	報74・文72C	1				
24 〃 Astāna	1915	Ast. i 區3號墓	覆眼	6世紀末7世紀	Stein・報74	2				
25 〃 〃	〃	〃 V 〃 2 〃	死者口中	?	Stein・報74	1				
26 〃 〃	1959	TAM 302	死者口中(女)	永徽4=653	文60A・考66A	2				
27 〃 〃	1960	〃	〃	?	文60A・報74	1				
28 〃 〃	〃	〃 319	死者口中	龍朔3=663	文60A・報74	1				
29 〃 〃	〃	〃 322	〃	順慶1文書656	文60A・報74	2				
30 〃 〃	〃	〃 325	〃	麟德2=665	文60A・報74	1				
31 〃 〃	〃	〃 332	死者口中(女)	順慶2=657	文60A・報74	1				
32 〃 〃	〃	〃 337	墓室土中	乾封2=667	考66A・報74	1				
33 〃 〃	〃	〃 338	〃	延壽3=626	報74	1				
34 〃 〃	〃	〃 339	〃	〃	〃	1				
35 〃 〃	1967	〃 363	死者口中	景龍4寫本710	文72A・報74	1				
36 〃 〃	1973	〃 206	覆眼(女)	永昌年=689	報74・文75	1				
37 〃 〃	〃	〃 115	?	?	報74・文75	1				
38 〃 〃	1939	〃 118	死者口中	?	報74・文72C	1				
39 〃 〃	1972	〃 149	死者口中(女)	?	報74	1				
40 〃 〃	1964	〃 20	〃	神龍2文書706	報74・文73	1				
41 〃 〃	〃	〃 23	死者口中(男)	垂拱1文書685	報74・文73	1				
42 〃 〃	1966	〃 48	(女)	延和4衣物疏604	報74・文72C	1				
43 〃 〃	〃	〃 73	〃	?	報74・文72C	1				
44 〃 〃	1967	〃 77	〃	?	報74・文72C	1				
45 〃 〃	〃	〃 78	(男)	延壽15=638	報74・文72C	1				
46 〃 〃	〃	〃 82	(女)	延壽16=639	報74・文72C	1				
47 Kucha, Subashi	1928	龜茲都城跡	表面採集	?	黄58・専61	1				
48 Kāshghar, 烏恰	1959	?	布袋中一括	?	考59C	947				
						1,178	14	14	4	4 (エフタル貨を含む)

() 内は発行年次(西暦), 2 段併記は未決定, ~で結ぶのはその間の年次, 中黒はどちらの型式もあることを示す。

(㉞) 高昌都城跡出土。シャープールⅡ世貨・アルダシールⅡ世貨・シャープールⅢ世貨一括一〇枚(寸法については専六一、一一八一―一二〇頁)。重量はシャープールⅡ世貨の二枚が四・一グラムであるほかは四・二グラム(専六一、一八頁)。シャープールⅡ世貨はIa6a式で、四枚(圖11―14)。アルダシールⅡ世貨はI1式で、五枚(圖22―26)。シャープールⅢ世貨はI1式の一枚(圖32)。

(㉟) 高昌都城跡出土。アルダシールⅡ世貨I1式、二枚(圖27、28)(寸法・重量不明。専六一、一二七頁)。

(㊱) スタイン収集貨。一枚。王名不明(Stein, II, p. 993), 夏氏は高昌都城跡出土とするが、出所は不明である。(報七四、九二頁、表)。

(㊲) ヤールⅡホト六號墓出土。ホスローⅡ世貨、一枚(圖67)(寸法・重量不明)。夏鼐氏は裏左側の年數を、前半ははっきりしないが、末尾はHとよんだ。前半は確かに判りにくい。しかし末尾はHではなく、Aであろう。末尾にAのつく數は、TLTA(KhoMSha'TSha'ARBA)である。ARBAの場合BとAとは上下に重ね書きするのが普通であり、この貨幣では重ね書きをした形迹がない。したがって前三者、すなわち、三か、五か、九を考えることができよう。裏面の祭司の冠ははっきりしない。もし冠に三日月があれば年數は一一以降のものが記されるはずである。上の年數の読み方がもし正しければ、祭司の冠に三日月がないものとしてI2式にこの貨幣をあてることが許されよう(専六一、一二七頁)。

(㊳) ヤールⅡホト Yar Khato 五六號墓出土。ホスローⅡ世貨、一枚(圖68)(寸法・重量は不明)。裏の祭司がかぶる冠は三日月形をつけている。年數は夏氏の讀んだごとく、YAJD[H](=一一)で、六〇〇年ごろの發行である(専六一、一二七頁)。

(㊴) カラⅡホージャ Kara Khoja 墓出土。ホスローⅡ世貨、一枚(圖70)(夏氏は直徑を二七ミリとし、黃文弼は二六ミリとする。重量三グラム。専六一、一二四頁。黃五四、四九頁参照)。裏右側の鑄造地を夏氏が BiSh と讀んだのは

正しい。左側の年数を [AR]BA (＝四) としたが、はっきりよめるのはたしかに BA だけで、ARBA、ShBA 両方の可能性を残しているものである。ShBA は七であるから、五九六年でもよいはずである。

(三) KM 八號墓出土。ホスローⅡ世貨式アラブ・サーサーン貨、一枚(直徑二七・二九ミリ、重量三・一グラム)。報七四の表五に掲載されただけで、貨幣は公表されていない。夏鼐氏は外縁に Bism Allah の銘があるとしているので、アラブ・サーサーン貨である。年数は三〇とよめるらしいので、ヤズドガルド紀元とみて六六一年をあてうる。

(四) KM 三九號墓出土。一枚。王名、寸法、重量ともに不明。腐蝕し細片になっている由(報七四の表五を参照)。

(五) アスターナ Astāna : 區三號墓出土。ホルミズドⅣ世貨、二枚(直徑二八ミリ、三〇ミリ、重量不明)(圖 65、66)。スタインの記述によると「...were found two Sassanian silver coins which Mr. Whitehead has identified as issues of either Khusrū I (Naushirvan, A.D. 531-79) or Hormizd IV (A.D. 579-91)...」とある(Stein, II, p. 647)。附録 B では J Ⅱ アランはこれを「Sassanian coins AR, of Hormizd IV (A.D. 579-90) and Khusrāu I (A.D. 531-79) found over eyes of body in Ast. i, 3」であると(Stein, II, p. 993)。夏鼐氏も(報七四)、岡崎氏も(岡崎八〇)「アランの記述を襲用している。ところがこの二枚とも、表面は連珠單圈をもち、圈外に星十三日月のセットをもつ。Stein, III, pl. cxx. をみると、その第一八圖はこれがはっきりしている(圖 65)。また、その第一九圖では九時の位置の星十三日月がはっきりよみとれる(圖 66)。星十三日月のセットが一隅だけにあるなどという貨幣は例がないから、他の二隅の分は摩滅(ダイの摩滅もありうる)もしくは腐蝕したのである。それに表面の一二時の位置に三日月のような形がみえる。この形は連珠圈を横切っている。連珠圈を横切って三日月形が表現される例はない。三日月形は必ず連珠圈の外において表現される。だから、ここで連珠圈を横切って表現されたものは三日月のようにみえるけれども、實は冠帽の上の球形である。そうすると、この貨幣の表面は、外縁三隅に星十三日月のセットをもち、單一の連珠圈があり、王冠は球形を頂くタ

イプということになる。裏面には星十三日月のセットがなく、単一連珠圈である。このような表面・裏面の型式に合致するのは、カワードⅠ世貨Ⅱ1式とホルミズドⅣ世貨(Ⅰ1式のみ)だけである。前者の王冠は冠帽の上に受軸がつき、その上に球形と三日月をおき、受軸からリボンが左右になびいている。これにはひるがえるリボンがみえない。残るホルミズドⅣ世貨にこれをあてる由縁である。この貨幣の年数はとうてい讀めない。重量の記載がないので斷定できないが、一般に知られているホルミズド貨と異なって圈外の周縁部が極端にせまく、圓形を意識して、截斷したもののようなものである。もう一枚、すなわち圖65の方は、王名はあきらかに *Auhrmazi* を意圖している。年数は *AYOKI ShTA' AShRA* のどれかに讀みうる。最後の文字は *AYOKI* を意圖しているようにみえる。すなわち第一年、五七九年である。

(四) アスターナⅤ區二號墓出土。含錢として出土したが、細片となっていて王名を定めがたい (Stein, II, pp. 654, 994)。

(四) TAM三〇二號墓出土。(1) ヤズドガルドⅢ世貨、一枚。(2) ヤズドガルドⅢ世貨式アラブⅡサーンサーン貨、一枚(この(四)から(四)までの寸法・重量は、報七四の表五を参照)。

(1) ヤズドガルドⅢ世貨(圖83)。表面は連珠單圈、裏面は重圈であるからⅠ1式に屬する。鑄造地は讀みにくいが、SKではない。SK銘をもつⅠ1式は第一〇年までの年數をもつ貨幣がしられている。そうでないⅠ1式はみな第一年から第三年までである。これもはっきり第一年 (*AYOKI*) と讀め、六三二年である。

(2) ヤズドガルドⅢ世貨式アラブⅡサーンサーン貨(圖85)。表が重圈、裏が三重圈であるからヤズドガルドⅢ世貨Ⅱ2式である。この手の貨幣には第四年から第二〇年の年數があるが、ここでは *VIST* (Ⅱ二〇) である。表面の三時と六時の間にクローフィック體で書いたアラビア語銘 *JAYID* 「善なる」がある (Walker, p. 3)。夏鼎氏はパフラヴィーの *A[F]D* であるとしたが、錯誤である。したがって、この貨幣はヤズドガルド紀元二〇年、ヒジュラ紀元三一年に當る六

五一年發行のアラブ＝サーサーン貨である。

(㉔)※ TAM三一九號墓出土貨は王名が同定できない。穿孔がひとつある。以下※印を附したものは貨幣が公表されていないもので、報七四の表五にのみ掲出されているもの。王名の同定や年數の讀みなど、すべて夏肅氏に従わざるをえない。

(㉕)※ TAM三二二號墓出土。ホスローⅡ世貨、一枚。發行年は六二二年。外縁が截りとられている。

(㉖)※ TAM三二五號墓出土。(1)ホスローⅡ世貨、一枚。(2)王名不明貨、一枚。いずれも年數不明。

(㉗)※ TAM三三二號墓出土。ホスローⅡ世貨、一枚。年數は三〇、六一九年。

(㉘)※ TAM三三七號墓出土。王名不明。

(㉙) TAM三三八號墓出土。ホスローⅡ世貨Ⅱ3式、一枚(圖79)。表面の三時と六時の間に AFD と記す。年數は三七で、六二六年である(考六六A)。

(㉚)※ TAM三三九號墓出土。ホスローⅡ世貨、一枚。年數は「三一(＝六二〇)?」である。

(㉛) TAM三六三號墓出土。ヤズドガルドⅢ世貨Ⅱ2式、一枚(圖84)。第四年から第二〇年まで、すなわち、六三五年から六五一年までの年代にはいる(文七二A)。

(㉜)※ TAM二〇六號墓出土。ホスローⅡ世貨、一枚。外縁を截っている。年數は三〇で、六一九年。

(㉝)※ TAM一一五號墓出土。ペーロース貨Ⅲ式、一枚。裏は不明である。穿孔がひとつある。

(㉞)※ TAM一一八號墓出土。ホスローⅡ世貨、一枚。年數は二五で、六一四年。

(㉟) TAM一四九號墓出土。ホスローⅡ世貨Ⅲ3式、一枚(圖77)。で、もとは鑒金であるという。また上下に穿孔各一がある。鑒金はサーサーン朝以外でおこなわれ、穿孔して縫いつけたりして裝身具となったのであろう。夏肅氏は年數を一五とよんだが HFTSH(＝三七)が正しく、したがって六二六年である。

(卯)※ TAM二〇號墓出土。ホスローⅡ世貨、一枚。年數は三三で、六二二年。外縁が截られているという。

(酉)※ TAM二九號墓出土。ボーラーン女帝貨、一枚。二年すなわち六三一年と夏氏は讀んでいる。

(戌) TAM四八號墓出土。ザーマस्प Zamasp 貨、一枚(圖56)。鑒金で、環をつけ、穿孔ひとつがある。ザーマस्प 貨の王冠はきわだった特色があり、またすべてザーマस्प 貨は表面右にアフラマズダーをあらわし、フヴァルナーたる環を王に向ってさし出して神授王權を示している。環にはリボンがつくが、このあり方に二つあり、この貨幣の場合は二條長く下になびいたものである。年數を夏氏は TLTA (二三) とよんでいるが、正しい。四九八―九九年である。

(寅)※ TAM七三號墓出土。ホスローⅡ世貨、一枚。年數不明。

(卯)※ TAM七七號墓出土。ホスローⅡ世貨、一枚。年數は一年か、と夏氏はしている。

(酉)※ TAM七八號墓出土。ホスローⅡ世貨、一枚。年數不明。

(寅)※ TAM九二號墓出土。ホスローⅡ世貨、一枚。年數は三〇で、六一九年に當る。

(卯) スバシ出土。ホスローⅡ世貨式アラブ―サーサーン貨、一枚(直徑二三ミリ、重量一・八グラム)(圖86)。表面の王像の左に AFZUT 銘とモノグラム。右に王名 Khusru がある。夏氏は王名の前に GDH なる銘があるとしたが、モノグラムを見誤ったのである。裏面の左にある年數を夏氏は NUJYISTJ と見て、二九年とよんだが、何とか讀めるのは NUJ までで、そのあとは摩滅ときずによりはなだ讀みにくく、NUJYIST NUJSIH NUJDH のどれとも定めがたいのではないか。

夏氏は詳細に検討して、この貨幣の周縁が一・八グラムを意識してあきらかに截斷されたものという結論に達した。一・八グラムはヘシドラフム hemidrahm だからである。ウマイヤ朝初期、アブダルマリク Abd al-Malik ibn Marwan およびハッジャージュ al-Hajjaj ibn Yusuf の時代に、アラブ―ディルハム Arab dirham は三種あり、その中のひと

つがタバリー＝ディルハム Tabari dirham とよばれたこと、アラブ史家の言うところである。タバリー＝ディルハムの重量はヘミドラフムであるが、実際にウマイヤ朝銀貨にヘミドラフムとして鑄造されたものはなく、もちろんサーサーン後期銀貨にもなく、むしろ時代が降ってアッバース朝下のタバリストーン Tabaristan では行われた。アラブ史家の言うタバリー＝ディルハムはウマイヤ朝初期のことを指しているので、アッバース朝では合わない。そこでウォーカーはこのような剪邊タイプのヘミドラフム貨をアラブ史家の言うタバリー＝ディルハムだとみている (Walker, pp. cxlviii-cxlix)。年数はもし夏氏の読みでよいとすれば、二九年である。これをヤズドガルド紀元にあてると六六〇年、ヒジュラ紀元にあてると六四九年となる。一九年とすると、ヤズドガルド紀元では六五〇年、ヒジュラ紀元では六三九年。あるいは三九年とすると、ヤズドガルド紀元では六七〇年、ヒジュラ紀元では六五九年。これらの年代を歴史環境に當ててみると、一九年は到底考えられない。二九年の場合はヤズドガルド紀元で考えるべきであり、三九年の場合は、ヤズドガルド、ヒジュラ兩紀元がなり立つ (Walker, pp. xxv-xxxvii)。

(四) カシニガル Kashghar の一括出土貨。李遇春氏によると、ホスローⅠ世貨二、ホスローⅡ世貨五六七、ホスローⅢ世貨式アラブ＝サーサーン貨二八一、残缺六三、鏽による不明三四である。このうち拓本で公表されたのは、李遇春氏の言うホスローⅠ世貨一枚 (圖89)、同じくホスローⅡ世貨一枚 (圖90)。ホスローⅡ世貨の中には、(1)表面外縁に圓形圖案記號を刻印したもの、(2)背面外縁に墨書文字、あるいは(3)中央に圓圈を描いたものがあると李氏はいふ。(1)は普通アラブ＝サーサーン貨と言われるものであるから、李氏は外縁にアラビア文字刻印のあるホスローⅡ世貨式貨幣だけをアラブ＝サーサーン貨とみたことが判る。したがってアラブ＝サーサーン貨の實數が判明しない。同様にホスローⅡ世貨五六七枚中にこのアラブ＝サーサーン貨が含まれているわけであるから、ホスローⅡ世貨の實數も見當がつかない。公表された拓本をみると、アラビア文字刻印のあるものが一枚 (圖91)、圓形刻印のあるものが五枚 (圖88、92-96) ある。

いま、公表された貨幣を順を追って検討すると次のとおりである。

(1) ホスローⅠ世貨といわれるもの(圖89)。表面右の王名は、あきらかに [AUH]RMZI あるいは [AUH]RMZ であって、ホルミズドを意味している。 AUSRUD' AUSRUDI' AUSRUI' KHUSRUB' KHUSRUD' KHUSRUDI' KHUSRI' KHUSRUTI' とよめればホスローではある。傍線部分が鍵である。表面外縁三時の位置に少くとも星十三日月のセットがよめる。單圈でこのセットをもつのは、ホルミズドⅣ世貨、カワートⅡ世貨、アルダシールⅢ世貨、ヤズドガルドⅢ世貨である。これらの諸王の貨幣で、裏に星十三日月のセットが無く、單圈があるのは、ホルミズドⅣ世貨だけである。李氏がホスローⅠ世貨とした二枚のうち少くとも一枚はホルミズドⅣ世貨だということになり、残る一枚(未公表)も當然その同定に關して安心できない。

(2) ホスローⅡ世貨の王名は讀みにくい(圖90)。年數はたしかに HSHTVIST(=二八)である。表面に星十三日月のセットおよび二重圈があり、裏に星と三日月のセット及び三重圈がある貨幣は、ホスローⅡ世貨Ⅱ式とⅢ式、ポーライン貨、ホルミズドⅤ世貨、ホスローⅤ世貨、ヤズドガルドⅢ世貨Ⅱ2式である。ところがホスローⅡ世を除くと、王の在位年數はみな二〇年をこえない。したがってこれはホスローⅡ世貨Ⅱ3式で、年代は六二七年となる。

(3) 李氏の言うホスローⅡ世貨型のウマイヤ朝貨幣は、表面の外縁に Bismi Allah(圖91)とある。年數は讀みとりがたい。

(4) 刻印したものはみなホスローⅡ世貨を用いている。圓形中の圖紋は公表された拓本でははっきりしない。なかにひとつだけ別の印がある(圖95)。このマークはゲブルによると、ホスローⅡ世貨では第一六年、第二一年、第三五年の年數をもつ貨幣にあらわれ、六八〇年ころを下限としてることがわかる(Göbl 1967, II, pp.161-64)。

このようにカーシュガルの一括貨幣は九四七枚という多數にのぼり、重要であるにもかかわらず、公表枚數がそれに反

比例して少く、そのうえ李遇春氏の貨幣同定には疑問點が多く、その分類にしたがう數量は確定できない。以上、第一章と第二章における検討の結果をまとめたのが、一三〇頁―一三一頁の表である。

三 東方におけるサーサーン式銀貨

(一) 出土情況の検討

西寧以東一四ヶ所、トルファン以西三三ヶ所にわたってサーサーン式銀貨は出土している。西寧以東トルファン以西という區切り方は、いわば河西の地を境に東の中國世界と西の中央アジア世界とを區分して考慮しなければならないことをいう。中國本土の一四ヶ所は、五ヶ所が西安とその附近であるほか、陝西耀縣・河南洛陽・河南陝縣・山西太原・河北定縣、それから内蒙フフホト・廣東・青海におよんで廣い分布である。これに對し、西方では三三ヶ所の出土地點を數えるといつても、クチャやカーシュガルを除くとみなトルファン内に集中しているといった特色がある。

出土の遺跡をみると、河西以東の中國内部では(一)・(二)・(三)・(四)・(五)・(六)・(七)・(八)の八ヶ所までが墓葬であり、殘る(九)・(十)が佛塔で、そのほか三ヶ所のうち、城市跡はわずかに一ヶ所、窖藏とこれに類するものが二ヶ所(四)・(十)となっている。トルファンにおける遺跡は出土三三のうち三例だけが高昌都城跡で、あとはみなアスターナ墓地・カラ・ホージャ墓地・交河城墓地といった墓葬の出土である。高昌都城跡出土のうち、すくなくとも(九)の、方盒にはいつて出土したものだけは、都城内で出土したものの、佛塔に關係したものの可能性が高い。このように中國内外を問わず、サーサーン式銀貨は墓に死者とともにおさめられてしまった例が壓倒的に多いのである。墓について多いのは、佛塔であり、これも

埋納という點では墓の場合と同じ結果を通貨にとつてはもたらす性格をもっている。このことは、より西方、サーサーン本土ないし、サーサーンの近東においてサーサーン貨が出土する場合、ほとんど都市や町邑といった集落跡であることと對照的である。夏爾氏は各貨幣の發行年と埋葬年との關係についてこれを圖表化した（報七四、九九頁、一〇〇頁）、兩者の間隔の大小にかかわりなく、埋納してしまつて現實の貨幣としての意味を失わせることが極端に多いところに、このような西方の通貨の、その通貨の本地と異なつた遠東の地域において果した意味をうかがうことができる。

この場合、同じく墓と言っても、中國内部の場合とトルファンとはその用い方が異なる。李靜訓墓(一)では石棺の中に、サーサーン貨と銀製の琴爪一〇個を入れた銅鉢をいれていたし、金勝村墓(四)では女性被葬者の頭の上の方においた漆盒の中に、ガラス玉・銅玉・木玉・銀製指輪やその他の飾りものを主とした物品といっしょに入れている。さらに英德縣南齊墓の場合でも、所在はわからないが、朱塗りの木盒の中に入れてあつた。ほかの(二)・(三)・(四)・(五)、まして(六)などの場合については原位置すら不明であるが、(七)の洛陽の唐三〇號墓では、金勝村墓の場合と同じように副葬品が二體のうち西側の被葬者の頭上に集中し、しかもいろいろな盒が多い。さきに記したようにサーサーン銀貨がどこにあつたかは報告されていないが、盒のうちのひとつの中に入っていたかもしれないのである。だからサーサーン貨を副葬品として盒あるいは鉢といった容器に入れた傾向は時代を問わずうかがうことができる。

もうひとつ考えられることは、盒に關連して裝身具や李靜訓墓で言えば琴の爪といった身邊の品物がサーサーン貨とだいたいいっしょになっている點である。そうしてこのことは、サーサーン貨と直接關係する被葬者が女性である可能性が高いことにむすびついてくる。張家坡二一三號墓や韓森寨三〇號墓では何とも言えないが、李靜訓墓は女性。洛陽三〇號墓の場合は、墓室の西側の被葬者がよく保存され、東側のはくずれていて、東南部に寄り、報告者はこれを遷葬としている。副葬品はみな西側の被葬者の頭部にあつてその中にまだ紅の残る白磁の盒があつた。東側の被葬者を西側の人間が死

んだときにはじめて合葬したのではなく、さきに東側に安置して、のちに西側の人間を追葬したとも考えられる。東側は奥で、西側は手前に當る。手前に女性をおいたことになる。陝縣墓の場合は、被葬者の墓室における位置關係がわからないが、夫婦墓であり、金勝村墓では、奥が男、手前が女であり、女の頭上にサーサーン貨はあった。手前に女を安置することが認められるのなら、洛陽の場合もサーサーン貨は女に關係してこよう。

トルファンの場合は同じ墓でも副葬品としてサーサーン貨は入ってこない。男・女ともに區別なく壓倒的に多いのは含錢としてであり、覆眼としてである。墓室内のかきあつめた土から出ているものが三例。これは解釋ができないけれども、トルファンの墓で出土情況が不明なのはヤール・ホトの二つとアスターナのひとつだけであるから、みな含錢や覆眼としてのサーサーン貨が用いられたとみてもよいのであらう。含錢や覆眼は、生前身邊にあつた物品を埋納しておくという意味からは副葬品ではなく、習俗の問題である。

つぎにサーサーン貨を出土した遺跡の年代をみると、中國内部とトルファンとできわだった相異がみられることもまた事實である。中國内部では、五世紀末のものが二、六世紀末のものが一、七世紀初のものが二、六世紀末から七世紀のものが一、七世紀末のものが一、七世紀から八世紀中葉のものが一、八世紀前半から中葉にわたるものが二、不明が四である。五世紀末から八世紀中葉にわたる長期に及んでサーサーン貨は副葬品となった。これに對してトルファンで、サーサーン貨が墓に入るのは、六〇四年（延和四年）の年紀をもつ衣物疏を出したアスターナ四八號墓を最初とする。年紀のない一一五號墓は、『高昌末（隋）』とされ、七三、七七、一一八、一四九號の諸墓はみな『唐墓』とされているから（報七四、表五）、サーサーン貨を死者とともに入れた墓は七世紀のはじめにまではさかのぼりうるが、中國の内部のように、六世紀、五世紀に及ぶものはないのである。そして年紀をもたない墓の場合はみなほぼ唐墓といわれ、年紀をもつ墓の場合も、六二六、六三八、六三九、六五三、六五七、六六三、六六五、六六七、六八五、六八九、七〇六、七一〇というように七

世紀後半に集中し、七世紀前半あるいは八世紀のものはかえってすくなくなる傾向にあると言えよう。このようないちじるしいがいには第三、第四節以降の問題ともからんでいるが、數量からみても、トルファンといった西アジアに直結する舞臺をこえて中國にサーサーン貨があらわれている點をここでは注意しておくのにとどめる。

最後につけ加えておかねばならない事實は、廣い東トルキスタンの中でもトルファンに集中している現象のことである。カーシュガルの九四七枚を別にとすると、クチャで一枚が採集されただけで、あとは全部トルファンだからである。トルファンにおける考古調査、とくにアスターナのそれが他の新疆地區にくらべて進捗していることはたしかにこのような現象を生みだす遠因になってはいよう。しかし、東トルキスタンをほぼ巡回して調査したスタインは各地で貨幣類を収集したが、その収集貨幣を整理してみるとほぼ次のごとくである。ホータンを中心とする南道西部でシノ||カロシユティ||銅貨が二一五枚以上、カルガリクにおいて一枚のインド||グreek貨と二枚のパルティア貨、またクシャーナ貨がホータンで二枚とヨートカンで四枚、その他で一枚。あるいはカルガリクでビザンツ貨二枚である。サーサーン貨はさきにも述べたアスターナ墓で入手しただけで、他の地區では全く収集していないのである。たとえ考古調査がいまトルファンに集中しているとしても、このようなスタインの収集情況よりして、トルファン以外の地でサーサーン貨が出土することは稀であると一應みておく必要がある。ここで再びトルファン出土量をうわまわる中國内出土サーサーン貨の量のもつ意味が深まるわけである。

(二) 出土貨幣の傾向

前章で検討した同定にもとづいて、出土したサーサーン式銀貨傾向をみると次のとおりである。シャープールII世・アルダシールII世・シャープールIII世・ヤズドガルドII世・ペーローズ・ザーマスプ・カワードI世・ホスローI世・ホル

ミズドⅣ世・ホスローⅡ世・ボーラーン・ヤズドガルドⅢ世の貨幣、それに少くとも一枚のアルダシルⅢ世貨が出土している。すなわちサーサーン朝帝王すべての銀貨が傳入しているのではない。東方に傳入したもつとも古いものはシャープールⅡ世貨である。シャープールⅡ世貨にはドラフム、オボル obol、半オボルなどの銀貨、ディーナール dinar、六分の一ディーナールなどの金貨があり、また貨幣型式も多様である。さきにのべたとおり、出土したのはそのうちのⅠa 6a式に限定され、その前後の數型式は全く傳播していない。アルダシルⅡ世貨もⅠ1式ばかりでシャープールⅢ世貨はⅠ1式・Ⅰ2式がある。ここまでは三代にわたる王の貨幣がそれぞれ型式は限定されながら繼續して傳入した。

シャープールⅢ世につぐワラフラーンⅣ世(三八八―九九)・ヤズドガルドⅠ世(三九九―四二〇)、ワラフラーンⅤ世(四二〇―三八)など三王の貨幣は届かず、ヤズドガルドⅡ世(四三八―五七)貨から再び流入した。四世紀末から五世紀はじめ、すなわちヤズドガルドⅡ世貨は最初のⅠ1式が出土しているので、四三八年あたりまでの時代にはサーサーン貨幣は動かなかったのである。このヤズドガルドⅡ世貨Ⅰ式を使ったエフタル貨が伴出したことは特に注目してよいが、これについてはのちにのべよう。ヤズドガルドⅡ世につづいて王位についたペーローズの貨幣は發行數のすくない初期のⅠ式が出土していない。これ以外ではⅡ1・Ⅱ2・Ⅱ3・Ⅲ1・Ⅲ3といったすべての型式がそろっている。ペーローズの次のワルカーシュ Valkāsh の貨幣は出土せず、次のザーマस्प(四九七―九九)とカワードⅠ世(四八四、四八八―九七、四九九―五三一)との貨幣は、ザーマस्पのものが一枚、カワードⅠ世のものが二枚出ている。カワードⅠ世貨はⅠ1・Ⅱ1・Ⅲ1・Ⅲ2の四型式がサーサーン本土で發行され、中國で出土したのはわずかに二枚であるが、そのうちのⅡ1・Ⅲ2の二型式があらわれている。これはヴァラエティに豊んだ鑄造をそのまま反映しているといつてよい。これと對照的なのは、次のホスローⅠ世(五三一―七九)の貨幣であり、それには三型式があるのに、Ⅱ2式ばかりが出土している。ホルミズドⅣ世はホスローⅠ世を繼いだ帝王である。Ⅰ1式二枚がトルファンにとどいたにすぎない。ホルミズドⅣ世

はホスローⅠ世とテュルク公主との間に生れ、テュルク・ザデの異名があり、對テュルク戦にはミヒラーン Mihran 家の將軍ワラフラーンⅡ・チョービン Varhran chōbin の功によって大勝し、また對東ローマ戦では敗れた（五八九年）。この敗戦はワラフラーンⅡ・チョービンの解任をもたらし、彼はこれを契機としてアルダシール王家に反亂して王位につく（五九〇—九一）。またワラフラーンⅡ・チョービン軍の力によってウイスターフムが彼を襲い、メディア Media で王位についている。このようにホルミズドⅣ世代の末から次のホスローⅡ世代はじめの七年間は、アルダシール王家に對抗する二者が僭稱して内亂状態にあったのである。ワラフラーンⅡ・チョービンからウイスターフムにかけての騷亂のうち、ホスローⅡ世は大量に銀貨を鑄造していった。ホスローⅡ世は約三八年の長い在位の割に銀貨の型式はすくなく、とくに王冠制の變化がすくなく。そのため後世ウマイヤ朝初期にいたってもなおこの王の貨幣を基本とした通貨を通用させたほどに信用が永續している。ここにみてきたホスローⅡ世貨もその第二年から最後の年次を示すものまで時代の幅が廣い。

ホスローⅡ世ののちサーサーン朝最後のヤズドガルドⅢ世の登位まで、六二八年から六三二年までのわずか四年ほどの間は、あいついで五王が登位した。この五王の貨幣は發行數も限定され、ホスローⅡ世のもののように信用が獲得されていたかどうか至って心もとないが、そのうちのアルダシールⅢ世（六二八—三〇）の銀貨一枚とボーラン女帝（六三〇—三一）の銀貨二枚が東方に届いている事實は注目すべきであらう。

ヤズドガルドⅢ世貨およびそののちの時代に屬するアラブ・サーサーン貨（ヤズドガルドⅢ世貨式一枚・ホスローⅡ世貨式三枚）は、ホスローⅡ世貨の二四枚に對して著るしく少くなっている。

このようにサーサーン王朝に照らして東方で出土した貨幣をみると、サーサーン貨の傳入は三世紀という王朝最初期においてはおこらず、四世紀も後半の貨幣に至ってはじめて東方に届いている。それ以後ヤズドガルドⅢ世までサーサーン貨の傳播は續いたが、その間に歴代サーサーン王の貨幣が閼斷なくはいつていたわけではない。また傳入した分の各王の

貨幣をみても、發行された全型式がはいっているわけではないのである。

次に數量や出土地の點でも特色があるので、これについて見よう。シャープールⅡ世・アルダシールⅡ世・シャープールⅢ世の貨幣は、三二枚がほとんどまわってトルファンだけで出土し、しかも、正確に出土情況は判らないにしても、みな高昌都城跡たるイディクトⅡシャフリ遺跡の出自である。(因)は方盒中に納められ、(因)は一括出土と伝えられ、岡崎氏の指摘のとおり方盒は佛塔の舍利容器としての性格を示唆し、一括二〇枚の(因)もあるいはこれと同じ性格のものであるかもしれない。いずれにせよ、これらの王貨の型式が限定されていることに特色をみることができる。

ヤズドガルドⅡ世貨もまた限られた型式で、枚數は次のペーローズ貨に比較するとももの數ではないが、エフタル貨と共にあること、また定縣のみで出土してペーローズ貨と共にあることがその傳入に一定の傾向があることを示している。

ペーローズ貨は洛陽邙山の殘缺六枚と未發表の八枚を計上すると、一三六枚に上る。各王貨の全出土枚數一一七八枚にはカーシユガルの九四七枚がはいっているのでこれを除くと、残りは一三三枚。一三六枚というペーローズ貨はその約六割に達する量である。しかもそのうちの一枚だけがトルファンで出土しただけで、一三五枚はみな中國以内で出土したのである。その出土のしかたをみると、西安、洛陽、定縣、英德、西寧というように廣く分布し、また多數が一括して出土する傾向をもっている。中國内だけで出土するという傾向は、數量はすくないが、ホスローⅠ世貨までみることができよう。

二四枚のホスローⅡ世貨はペーローズ貨に次ぐ枚數である。しかし、ここに至って前代まで存続した傾向は終り、トルファンから中國内にかけて出土することとなる。トルファンでは一六枚、中國では八枚で、トルファンのものは都城跡で出土した例はなく、例外なくアスターナの墓葬に伴い、また同様に中國のものは西安(長安)に集中しているといつてよい。枚數から見るとホスローⅡ世貨はトルファンにより傾いている。この方向はヤズドガルドⅢ世貨およびアラブⅡサー

サーン貨についても言えよう。ヤズドガルドⅢ世貨は二枚がトルファンⅡアスターナの墓で、アラブⅡサーサーン貨は一枚だけが太原で、二枚がアスターナで、一枚がクチャで出土しているからである。

(三) 埋藏年次と發行年次

貨幣の發行された年次とそれが傳播して墓ないし佛塔などに埋納された時點との間に長短がある。きわめて早い速度で傳入したことをそれによって判斷し、また傳入後永らく裝身具などの用に使われたのちに埋納されたことがわかるものがある。前者の例で顯著なものは(四)で、アスターナの三〇二號墓被葬者の口に含ませてあったヤズドガルドⅢ世貨式のアラブⅡサーサーン貨である。貨幣の年代は六五一年。墓は永徽四年(六五三)の墓志があったから、その間わずか二年ほどしかない。後者の例はアスターナ一四九號墓や四八號墓の鍔金のサーサーン貨、穿孔のサーサーン貨にみられ、またさきにのべたように中國における墓の、女性の裝身具としての貨幣にみることができ。埋葬時點と貨幣の年代との相差については夏鼐氏もさきに述べたとおりであり(報七四、九八一—一〇〇頁)、ここでは別の視點から觀察してみよう。

ペーローズ貨の埋藏時點をみると、隋李靜訓墓が大業四年で六〇八年、西安張家坡墓が六世紀末から七世紀、隋神德寺舍利塔が仁壽四年で六〇四年、定縣の佛塔が太和五年で四五一年、廣東英德縣の南齊八號墓が五世紀末である。アスターナ一五號墓と洛陽邙山墓との年代は正確にはわからないが、洛陽の方は八世紀までとは思われるし、西寧のものは開元通寶の伴出から考えて七世紀前半を埋藏の上限と考えることができよう。このような埋藏年代から二つの傾向が出てくる。埋藏量の多寡とは關係なく、定縣や廣東のもののように五世紀末の埋藏にかかる場合がひとつ。この他はみな六世紀末七世紀初頭の埋藏にかかる場合である。

ザーマスプ貨、カワードⅠ世貨、ホスローⅠ世貨もまずペーローズ貨の後者の場合に當らう。神德寺舍利塔が六〇四年、

劉偉墓が開皇三年であるから五八四年、アスターナ四八號墓からは高昌延和四年（六〇四年）の衣物疏が伴出しているからである。このような傾向から逆にフフホトの城跡におけるカワードⅠ世貨、ホスローⅠ世貨の埋藏をも、六世紀末から七世紀初頭のものとは推測できぬことはない。

ホスローⅡ世貨の場合はやや複雑である。西安を中心に出土したホスローⅡ世貨は、六一四年、六一六年（？）、六二四、六二六、六二八年の發行のものであり、六一四年のものが一枚あるいは二枚、斷定できないがおそらく六一六年と考えられるものが一枚、六二四年のものが少くとも二枚、六二六年のものが二枚、六二八年のものは一枚であり、ホスローⅡ世在位の後半に集中した貨幣である。こういった八枚のホスローⅡ世貨を出土した遺跡は西安韓森寨墓が八世紀前半とみられ、西安何家村窖藏は早くとも八世紀中葉、長安縣天子峪の至相寺舍利塔は七―八世紀とみられる。そうすると、どれもだいたい八世紀前半に集中して埋藏されたことになる。これらの貨幣がいまかりに七〇〇年に埋藏されたとして貨幣の發行年次とのひらきを算出すると、七二年、七四年、七六年、八四年、八六年であるから、埋藏までみな七〇年以上を經過していることが知れる。

一方、トルファンで出土したホスローⅡ世貨は、ヤールⅡホト墓出土貨幣では、五九六（？）のものが二枚と六〇〇年のものが一枚。アスターナ墓出土貨幣では、五九〇年、六一四年が各一、六一九年が四枚、六二二年が二枚、六二六年が二枚で、ホスローⅡ世在位の前半の貨幣が集中している。墓志あるいは文書などを出土して年代が明らかにできる墓は、六二六年、六三八年、六三九年、六五六年、六六三年、六六五年、六六七年、六八九年、七〇六年、であり、七世紀の墓に埋藏されたといってよい。これと貨幣年代との差は、七年、一九年、四一年、四六年、七〇年、八四年であり、七年から八四年までの差は大きく、中國内地の場合と比べるとばらつきが目立つことが特色である。中國内地とトルファンにおけるホスローⅡ世貨關係の相異は、ボーラーン貨についても言え、至相寺舍利塔のボーラーン貨の年代は六三一年で、七

〇〇年まで六九年あり、アスターナ二九號墓のボーラーン貨の年代は六三〇—三一で、この墓から垂拱元年（六八五）の文書が出土したから、埋藏まで五五年かかっている。ヤズドガルドⅢ世貨やアラブⅡサーサーン貨の場合は例がすくなく、今後の資料の増加を待つべきであるかもしれない。しかし、ホスローⅡ世貨、さらに早いペーローズ貨なども、いままでのところ八世紀をくだった埋藏がないことを考慮すると、これもやはり埋藏下限を八世紀と一應見ておいて大過ないものと思う。そう考えて太原金勝村墓のアラブⅡサーサーン貨（發行年代六五三—六一）をみると、それは七世紀末の埋藏であり、アスターナ三〇二號墓のヤズドガルドⅢ世貨（發行年代六三二年）・ヤズドガルドⅢ世貨式アラブⅡサーサーン貨（同六五一年）は永徽四年Ⅱ六五三年の埋藏、アスターナ三六三號墓のヤズドガルドⅢ世貨（發行年代六三五—五一）の埋藏は七一〇年（景龍四年卜天壽論語鄭氏注寫本）をさかのぼらない。そしてこれらの貨幣の發行から埋藏までの期間、二年、約四〇年、六〇年—七五年であり、ホスローⅡ世貨の場合と近似しているのである。

四 組み合わせと傳入時期

以上の調査により、東方において出土したサーサーン式銀貨は決して不規則に傳入したのではなく、方向性があることがいくつか判明した。その方向性の重要なひとつとしてとりあげなければならないのは、セット關係であり、これがすなわち東方傳播の波をあらわしているからである（以下、表1を参照のこと）。その第一はシャープールⅡ世貨・アルダシールⅡ世貨・シャープールⅢ世貨であり、(a)と(b)は正しくセットとしてこの一群があることを示すものである。傳入の時期はのちにのべるように五世紀初頭を下限とする。

第二群はヤズドガルドⅡ世からホスローⅠ世におよぶ一連の貨幣、ヤズドガルドⅡ世貨・ペーローズ貨・ザーマスプ貨、カワードⅠ世貨・ホスローⅠ世貨である。ヤズドガルドⅡ世をもってその最初とするのは、この貨幣とシャープールⅢ世

貨との間の時間に斷絶が認められることである。またホスローⅠ世をもって區切るのは、ホスローⅠ世貨がカワードⅠ世貨やペーローズ貨と（神徳寺舍利塔）、またはカワードⅠ世貨と（フフホト城跡）、セットで出土するものの、ホルミズドⅣ世以後の貨幣とは決して共伴していない事實に依る。ホスローⅠ世貨は後代に結びつかず、むしろ前の時代と結びつくからである。そして傳入の時期はホスローⅠ世貨に示された最後の發行年である五七五年以降、だいたい七世紀はじめまでと考えられる。しかしこの二群ではとくにペーローズ貨以前のものの傳入はかなり早い（後述）。

第三群はしたがってホスローⅡ世を中心としてホルミズドⅣ世からボーラーン女帝までの貨幣である。ボーラーンで區切るのは、第二群の場合のホスローⅠ世貨の傾向と同じく、ボーラーン貨がホスローⅡ世貨という前の時代の貨幣と共伴したからである。傳入の時期はほぼ七世紀いっぱいと考えてよい。

第四群はヤズドカルトⅢ世貨とアラブⅡサーサーン貨である。ヤズドガルドⅢ世貨とヤズドガルドⅢ世貨式のアラブⅡサーサーン貨とが共伴したこと（TAM三〇二）は、第四群を成立させる強力な證據である。ヤズドガルドⅢ世貨はその最初の年六三二年の發行であり、またアラブⅡサーサーン貨は六五一年の發行。これはヤズドガルドⅢ世の末年、いわばサーサーン朝の最後の年に當り、二つは異なった政治勢力の通貨ながら、同じような價值をになっていたと考えるからである。この一群の傳入した下限は七世紀末ないし八世紀はじめ、上限は六三二年である。

〔第一群〕 最初にこのセットを注意した夏竦氏は、カーブル東郊テペⅡマランジャーン Tepe Maranjān 佛寺跡の壁中に隱匿されていた同ようなセットに着目している。また岡崎敬氏はインダス河東のタキシラ Taxila でも、アルダシールⅡ世貨はないものの、シャープールⅡ世・Ⅲ世貨がセットになっているとしてその例示を附加し、またフォンドキスターン Fōndukistān 佛寺跡にもセットがあることに言及している（岡崎八〇・二二八頁）。

テペⅡマランジャーン出土のサーサーン貨は、はじめ（一九三三年）三七三枚と報告され、のちには（一九四〇）三六

○枚と改められた。カーブル博物館に收藏された枚数は三八八枚で、これを構成する各王の貨幣の枚数にもその都度異同がある。博物館のものを逐一調査したキュリエルの記述に従ってその型式を検討すると、シャープールⅡ世貨は三二六枚がみなIa6a式で、拜火壇の炎の中にアフラマズダーの居ない型式であることがわかる。アルダシールⅡ世貨は二枚あり、みなI1式。シャープールⅢ世貨は一四枚で、みなI1式である。キュリエルはこのセットの埋藏時期を設定してシャープールⅢ世のはじめ、ほぼ三八五年とした。シャープールⅢ世貨は、ヒンドウー・クシュ山脈の南とくにカーブル河流域に多く、決して流通量が少ないわけではないのに、テペ・マランジャーンでは著るしく他二王の貨幣量よりすくない埋藏である。このことによってキュリエルは埋藏時期をシャープールⅢ世の在位中はやい時代だと考えたのである。この考え方はそのまま夏鼐氏によって受容された。高昌都城跡の分も總枚数中シャープールⅢ世貨が四枚だという少なさと合致しているという理由からである（専六一、一二二頁）。

高昌都城跡における出土情況はその原位置を明確にしないうらみがあるが、ここではシャープールⅡ世貨にI1式ばかりでなく、少いながらI2式が存在する。このことはシャープールⅢ世の後期にまで降った貨幣があるという事實を示す。一方、テペ・マランジャーンの一括貨幣の中にはサーサーン貨だけでなく、いわゆるクシャーノ・サーサーン金貨一二枚が含まれている。ゲブルはこの一二枚の金貨の中に一枚だけきわめてくずれたタイプを見出し、それをサーサーンのワラフラーンⅣ世（三八八―九九）に併行する時期のものとみる（Göbl 1967, II, pp. 29-36）。ワラフラーンⅣ世はシャープールⅢ世を襲った王であるから、シャープールⅢ世よりひと時代遅れた貨幣がテペ・マランジャーン一括貨幣の中にあることになる。

ここでタキシラの證據をみると、ここではサーサーン貨は三〇〇枚をかぞえ、同定できるほどのものが約二〇〇枚ある。そのうちシャープールⅡ世貨は六三枚、シャープールⅢ世貨は三二枚である。これらの王に先立つサーサーン貨は至って

少数で、シャープールⅠ世貨一枚、シャープールⅠ世代の太守たるホルムズドの貨幣が三枚、ワラフラインⅡ世貨が一枚あるだけである。また、のちに續くものは四世紀末のワラフラインⅣ世貨が三枚、七世紀のホスローⅡ世貨が一枚あるだけである。シャープールⅡ世貨・Ⅲ世貨・ワラフラインⅣ世貨は二〇〇枚中の過半数を占め、五世紀の貨幣がまったく存在していない。^⑧岡崎氏はタキシラのダルマラージカーM5僧坊においてシャープールⅡ世貨五七枚・シャープールⅢ世貨七五枚といった大量のサーサーン貨が出土したことを言われたが、タキシラにおけるサーサーン貨の様相は以上に記した範囲を出ず、これは錯誤である。^⑨同様にフォンドキスターンにおいてもシャープールⅡ世貨三三八枚・アルダシルⅡ世貨一枚・シャープールⅢ世貨一枚が一括発見されたと氏は報じられたが、フォンドキスターン出土のサーサーン式貨幣は別稿で記したように五枚が骨壺の中から出土しただけで、しかもそれらはナプキーⅡマルカ型銀貨三枚・ガルジスターンⅡシャール型銀貨一枚・ホスローⅡ世貨式アラブⅡサーサーン銀貨一枚なので、ここでは問題外である。^⑩

このようにテペⅡマランジャーンの證據もタキシラの證據も、サーサーン朝の貨幣が四世紀後半にこの地方に流入し、五世紀にはいると急速に後退して出土していない事情を告げている。この動靜と一連の關係に高昌都城跡のセットがあることは改めて言うまでもない。シャープールⅢ世貨に後期のⅠ2式が一枚と言えど存在する事實は、その埋藏がシャープールⅢ世貨在位初期に決しておこったのではなく、四世紀末か五世紀はじめにみるべきであり、このことは高昌邊だけの孤立した事實ではなく、サーサーン東方域における廣い地域でおこったキダーラⅡクシャーンの興起と深く結びついている。キダーラⅡクシャーンがとくにヒンドウⅡクシュ南北を統一してサーサーンの勢力を拂拭したのは、榎一雄・山田明爾兩氏によつて四一三年から四三七年までの間であつたことが論證されている。^⑪テペⅡマランジャーンの埋藏はキダーラの興起と結びついたもの、タキシラで五世紀のサーサーン貨が乏しいのはキダーラⅡクシャーンが自らの貨幣をもち、ヒンドウⅡクシュの南北に一時勢力を張つてサーサーンの東方進出をおさえたからである。

〔第二群〕 ヤズドガルドⅡ世からホスローⅠ世にいたるサーサーン貨の傳入は、その量からも、また歴史の環境からも、ペーローズを境にして二期に細分される。しかし、全體を通してこの時期のサーサーンがエフタルと密接な關係にあったことがこの一群を成立させる背景になるう。エフタルとサーサーンとの關係は四世紀に既に認められ、シャープールⅡ世貨を使ったエフタル貨がしられるが、とくにヤズドガルドⅡ世は四四一年から四五二年ごろにかけてホラサーンで深く接觸し、幾度か敗走を喫した。エフタルとの停戰條件には必ずサーサーン銀貨を上納することがおこなわれ、エフタルはその銀貨を定縣出土品にみるごとく認印を後刻することにより自らの貨幣として通行させ、あるいはサーサーン貨そのままを使用した。そういった後刻印のあるサーサーン貨にはワフラーンⅤ世貨・ペーローズ貨・カワードⅠ世貨・ワルカーシユ貨・ホスローⅠ世貨がしられ、就中ペーローズ貨は最も多い^⑩。そのペーローズとは、對エフタル境界に關する條約をしばしば破棄したサーサーン王で、そのため對エフタル戰が繰り返され、自身も捕えられ、その身代金として膨大なペーローズ銀貨がエフタルの要求に従って動いた。またペーローズの子カワードⅠ世はペーローズのかわりに身代金が支拂われるまでの二年間エフタル王庭に拘束された。ペーローズはその後にエフタル戰を再開したが、この時敗死したのである。ペーローズ代のサーサーンは對外關係ばかりでなく、國內も不作・飢饉・災害が永續して極端な混亂狀態にあったといわれる。ペーローズにかわったカワードⅠ世の貨幣には四八四年（ペーローズ最後の年）を示すものがあるものの、そののち杜絶えて四八八年から四九七年までのものがまたあり、再び三年間とぎれて四九九年から五三一年までがそろっている。カワードⅠ世は即位したものの、上のような國內情勢を反映してカレン家はアルメニアで反亂し、ペーローズの兄ワルカーシユを王とした。ワルカーシユは四八四年から八八年までの四年間在位したが、追われたカワードⅠ世はペーローズの身代りに居たエフタル王庭に遁走し、エフタルの絶大な援護により四八八年ワルカーシユを下して復位したのである。その後カワードⅠ世は宗教問題で貴族と對立、幽閉され、再びエフタルの下に逃亡、その庇護下にあった。カワ

ードの長兄ザーマスプ (Paruck, p. 102 はワルカーシュのいとことする) はその間推されて三年の王位にある。カワードはこの度もエフタル軍とともに歸還し完全なエフタル傀儡王として五三一年まで在位することになった。次のホスロー一世の五三一年から五七九年に至る在位期間の中で、五六〇年ごろにエフタル勢力が分解しはじめ、おそくとも五六八年までには壊滅し、少くともオクサス以北がエフタルの手をはなれ、テュルク (室點密、シンジブ、ハーカーン、シルジブ、ス) の手に歸した。五五八年に室點密はその女婿ホスロー一世と協同でエフタルを破り、シャシュ、フェルガーナ、サマルカンド、キシユを占有し、さらに五六二年ごろに再びエフタルは室點密の攻撃をうけ、五六八年までに完全に壊滅してしまった。室點密とホスロー一世との同盟は、ソグド人の絹貿易に關係してくずれ、結局サーサーンはこの地方に對する支配權を獲得することはできなかった。こののち、サーサーンはエフタルにかわった西突厥と深いかわりを持たざるをえなくなるのである。¹⁴

北魏は、オールドスに勢力をもち、中原に覇權を爭った夏を四二七年に破り、その根據統萬城を陷し、¹⁵ 四三九年九月には北涼を討滅した。¹⁶ 北涼討滅に先立ち、北魏世祖太武帝は太延元年 (四三五) に西方との通交を開始し、使者二〇輩を西使させ、二年 (四三六) に使者六輩が行き、三年 (四三七) には散騎侍郎董琬と高明は錦帛をもって九國を招撫しつつ鄯善徑由北行して烏孫に至り、董琬はそこからフェルガーナに、高明はそこからタシュケントあたりまで行って東歸している。この前後に西域諸國から來貢があったことは、以上の記事とともに『魏書』世祖本紀にみえる。¹⁷

ペーローズ貨や定縣でペーローズ貨とセットになっていたヤズドガルド世貨はその發行年代からみて以上の世祖による使節派遣のちに傳入したことを示している。他のサーサーン貨を引きはなして大きい數量で出土したペーローズ貨は、前代のシャープール世貨をはじめとするセットと異なり、ほとんどみな中國内地に浸透している事實がある。この事實は、前代と異なって西方諸勢力が一掃され、中央アジアから中國北部にかけてひとつづきになったことが圓滑に流入する

背景であったことを示す。北涼が滅亡したのち太平眞君元年から六年までの五年間（四四〇—四五）、鄯善はその通行路を斷塞し、北魏と西方との交通が一時おとろえた。この間には粟特の入朝が一回あっただけ、萬度歸による鄯善平定（四五）以降、フェルガーナ、マイムルグ、カーシュガル、ターシュクルガン、キジールの入朝がはじまったことにこの事件は十分裏書きされている。

しかし、ヤズドガルドⅡ世貨とそれを使ったエフタル貨やペーローズ貨の傳入にこれらの入朝國がどの程度參與していたか、あるいは西域商胡がどの程度介在していたかは、もとよりつまびらかでない。特に定縣北魏五級佛圖は、孝文帝の敕願によって建立された佛塔である以上、直接サーサーンやエフタル、あるいはサマルカンド、ソグド人から皇室にもたらされた西域の銀貨であったとみることも許されよう。エフタルの北魏に對する入朝は、太安二年（四六五）を嚆矢とし、またヤズドガルドⅡ世の入朝は太安元年（四五五）を最初とする。とくにサーサーンは四一四年に東ローマと戰鬪状態にはいり、また、四五二年まではホラーサーンに關してエフタルと抗爭し、敗走を繰り返していた時に當る。四五五年におけるヤズドガルドⅡ世の入朝には、エフタル圏を通行せざるを得ない情況にあり、おそらくこれはエフタルの承認のもとに成り立ったものであらう。連年にわたる兩勢力の入朝が四五二年のホラサーン戰終結後におこっていることが注目されるのである。

このちエフタルの入朝は六世紀のはじめ五〇七年（北魏正始四年）まで杜絶する。四五九、四六〇年にはキダーラ・クシャーンなる居常國が平城に入朝しているので、ヒンドウ・クシュ山脈の北にはまだキダーラ・クシャーンの勢力があったのである。キダーラ・クシャーンが次に入朝するのは四七七年で、車多羅の名をもって正史にうかがうことができる。これはクシャーンの名を伝える最後の記録であるが、四六〇年から四七七年までの間におそらくエフタルはキダーラ・クシャーンを南に驅逐しオクサス流域を掌握し、これに忙殺されていたものと考えられる。これよりあとペーローズ末から

カワードⅠ世の最初の二〇年間、エフタルはさきにのべたとおり、サーサーンと深くかかわったのである。この間エフタルの朝貢がなかったことに反映している。エフタルがキダーラ＝クシャーンと交戦關係にあったと思われる四六〇年代から七〇年代にかけて、サーサーンのペーローズは和平二年（四六一）、天安元年（四六六）、皇興元年（四六七）、皇興二年（四六八）、承明元年（四七七）と、北魏平城に入朝することができた。カワードⅠ世の初期の混亂期にはエフタル、サーサーンともに入朝が完全に缺けているのである。こういった混亂の間隙をぬった時期にサマルカンドが四七三年から五〇九年の間に一回の朝貢をした事實は、ソグド地方におけるエフタルの掌握程度を示すものとして、注目に値する。

このようにエフタル・サーサーン・キダーラ＝クシャーン・サマルカンドの動向と彼らの北魏に對する入朝とは一連のつながりの中で考えることができる。そこでサーサーン貨の埋藏年次をみると、定縣の場合は四八一年であり、英德縣の場合は五世紀の終末の年であるか六世紀のごくはじめである。これらの場所で出土したペーローズ貨もヤズドガルド貨もエフタル貨もおそらくみなそれぞれの示すサーサーン王の在位時代に傳入した可能性が高く、もしこれが認められるならば、傳入は直接彼らが入朝に際してもたらしたものとみることができよう。

ペーローズ貨に關しては、このように埋藏年次が在位時代中にあるものの他に、七世紀はじめを上限とすると考えられるものがあつた。隋神德寺舍利塔の場合はこれがカワードⅠ世貨・ホースローⅠ世貨とセットになっていた。こういった埋藏がほぼ七世紀はじめに起こっていることは中國内だけではなく、アスターナの四八號墓（六〇四）といった高昌國でもみられ、そこにひとつの傾向をうかがうことができよう。

またペーローズ貨に對してカワードⅠ世のような完全にエフタルに支配權をうばわれたサーサーン王の貨幣がいちじるしく少ないこと。これとは逆にエフタルの朝貢數は五〇七年の再開から五五八年（北周明帝二年）にわたる約五〇年間に北朝に對しては一七回、南朝梁に對しては六回、通算二三回。最初の一三年間はほとんど連年にわたっている。この間サ

Ⅰサーンは一回で、エフタルにおさえられた事情がはっきりあらわれ、サマルカンドの朝貢は皆無となり、エフタル勢力の確立を示唆している。カワードⅠ世貨やホスローⅠ世貨はカーブル河流域、オクサス河流域、あるいはサマルカンドやブハーラに多く出土するサーサーン貨のひとつである。そのような貨幣がエフタルの入朝の頻度に反比例して中國にはほとんど届かなかった事情は、あるいは前代のように朝貢と貨幣との關係に變化が生じたことも考えられ、また出土貨幣の絶對量が僅少であること自身商胡の動きが一時停滯したとも考えられよう。再び活發にサーサーン貨が動くのはホスローⅡ世代をまつのである。

〔第三群〕 第二群がトルファン及びその西にごくまれで、中國内に集中しているのに對し、第三群は西安（長安）とトルファンに集中するといった顯著なちがいがみとめられる。第三群がホルミズドⅣ世から次のホスローⅡ世、またアルダシールⅢ世、ボーラーンなどの貨幣によって構成されることはさきに記したが、とくにホスローⅡ世貨が多いことは注目してよい。ホスローⅡ世貨はサーサーン本土からその東方域にかけても廣く分布し、またペーローズ貨とともに多數發行されたサーサーン貨である。同じく大量に鑄造された貨幣でもペーローズ貨は中國内にほとんどすべてあつまり、トルファンにとどまることがまれであったのに、ホスローⅡ世貨は西安で出土するといつてもその量はトルファン出土量の三分の一であつて、ホスローⅡ世貨がトルファンにとどまる傾向の強いことを示している。この背景として考えられるのは、前代のエフタルにかわつて天山北麓からソグド地方さらにトハリスターンを牛耳り、サーサーン朝イラーンにまで介入した西突厥、とくに射匱、統葉護兩可汗時代の西突厥のあり方であろう。

射匱可汗は處羅可汗を六一〇年―六一一年（大業七年）の間に攻略して西突厥の可汗位につき、『隋書』西突厥傳・裴矩傳、本據と考えられるスイーアープの他に龜茲北方のユルドゥズに王庭を定めた。『舊唐書』突厥傳には、「既に立ちし後、始めて土宇を開き、東は金山に至り、西は海に至り、玉門より已西の諸國は皆これに役屬す。遂に北突厥と敵たり。乃ち

庭を龜茲北の三彌山に建つ。…とみえ、東はアルタイより西はアラル海までの廣い地域を自領とした。したがって、これより前、處羅可汗時代に突厥より離反して高昌を牛耳っていた鐵勒（『隋書』西域傳高昌）²²も、「延陀・契苾の二部は並びに可汗の號を去って以て射置に臣となった。…」（『舊唐書』北狄傳鐵勒）²³から、高昌は射置の影響下にはいったであろう。統葉護可汗が兄の射置可汗をついだのは、大業一二年ごろから大業末、六一六年から六一八年の間で、射置可汗時代のユルドゥズから王庭を「石國北の千泉」に移し（『舊唐書』突厥傳下）、頻りにホスローⅡ世のペルシアを撃破した（『舊唐書』波斯傳）。その勢威は兄の在位時代よりはるかに大きく及び、北は鐵勒、西はペルシア、南はカーピシーに接し、ことごとくこれらを歸屬させ、その西域諸國の王に頡利發（イルテベル）の官號を與え、吐屯（トゥドゥン）一人を派遣して監察徵稅事務を掌握させた（『唐書』突厥傳下）。また東方に對してはボグドⅡオラ北麓の可汗浮圖を根據として東突厥・高昌ににらみをきかせていた。²⁴特に高昌麴文泰の妹が統葉護可汗の長子に嫁してオクサスのクンドゥズ（活國）に居たことは、『慈恩傳』に記録されたところである。²⁵『隋書』波斯傳には、「突厥はその國に至る能わざるも、またこれを羈縻す。」とあり、『舊唐書』波斯傳には「隋の大業末、西突厥葉護可汗は頻りに其の國を撃破す。波斯王庫薩和（ホスローⅡ世）は西突厥の殺す所となり、其の子施利（カワードⅡ世）立つ。葉護因りて其の部帥を分ちて、其國を監統す。波斯竟に葉護に臣たり。…」とみえる。すなわちホスローⅡ世までの西突厥の對ペルシア政策は直接的ではなく、深く介入するのはカワードⅡ世以降であったが、統葉護時代（貞觀二年Ⅱ六二八年まで）における高昌からソグドⅡトハリスターンにわたる支配がホスローⅡ世貨の動きにかかわっていることが理解されよう。このことは、ホスローⅡ世の、出土した貨幣を検討すると、トルファン出土のほかはみな射置可汗から統葉護可汗の時代とくに後者にかよっていることにある。岡崎氏が夙に注意したのは、玄奘渡印に際して高昌王麴文泰より旅資として贈與されたもののうち銀錢三萬にサーサーン銀貨がふくまれていたことであるが、²⁶トルファン出土の分の傾向をみると、銀錢三萬はすべてがサーサーン銀貨であり、

しかもホスローⅡ世貨のうち比較的初期のものであった可能性が高い。

〔第四群〕　ホスローⅡ世以後のペルシアがヤズデガルドⅢ世の暗殺による終末まで二十數年間に六王が立ち、混亂して崩壊への道を急いだことは、『舊唐書』卷一九八や『新唐書』卷二二一下の波斯傳中にも反映しているとおりである。

すなわちヤズデガルドⅢ世（伊嗣侯）は六五一年にトハリスターンにのがれる途次に大食のために落命し、その子供のペーローズ（卑路斯）は疾陵城（トハリスターン）の西突厥トハラヤブグの下にのがれた。彼は龍朔元年（六六二）に對大食のための援兵を高宗に救めたので、王名遠を派遣して六月一七日吐火羅に州縣を分置し、疾陵城を波斯都督府に列し、ペーローズを波斯都督とし、トハリスターンに聖德碑を立てている。以後貢獻があつたが、咸亨中（六七〇―六七三）にはペーローズが自ら入朝したので、高宗は右武衛將軍を授けてゐる。サーサーン末裔と唐との關係はペーローズの子ナルセフ（泥涅師）が景龍初年（七〇七）に來朝して長安で病死するまで續くが、ナルセフはペーローズ代に長安に質となり、調露元年（六七九）に裴行儉・王方翼にスイィアープまで護られて行き、ひとりトハリスターンにもどつてそこに客となつてゐる（『通鑑』卷二〇二、唐紀一八）。このように唐と末期のサーサーンとは直接つながりをもつていたが、サーサーン末期貨やアラブⅡサーサーン貨はきわめて出土例に乏しい。これは、ホスローⅡ世代とそのすぐのちの時代とは逆に、急速に東西間の交渉が低くなつたともみられようし、ホスローⅡ世貨のような高い信用をサーサーン貨が既に保持できなくなつたとも考えられよう。

アラブⅡサーサーン貨を含む、いわばサーサーン式銀貨の東方に對する傳播は、貨幣自身の検討の上に立つと、四世紀後半から七世紀後半までに及ぶ。しかしその間四群が設定されたように、それらはのべつ幕なしに流れ込んだのではなく、一定の節目に沿つていたのである。その節目は、第一群では四世紀末で、中央アジア西疆にキダーラクシャーンが興起

し、第二群ではやはりキダーラ＝クシャーンと同じ場所に勢力を張ったエフタル族をいかに考えられる介在者はいない。第三群の場合は統葉護可汗時代を中心とする西突厥がエフタルに代っただけである。第四群では介在者というよりもサーサーンと唐が直接觸れたことが考えられるが、この場合のサーサーンは衰えてトハリスターンに弱小の殘影として命脈を保っていた。このようにみな節目には當時中央アジアに一時の覇をとねた遊牧族が大きくかわり、また第四群の場合も含めてそういった貨幣はみなヒンウッド＝クシュの北麓からシル河にわたる地域と深い關係にあった。すなわちサーサーン式銀貨の東方傳播にとってはソグド＝トハリスターンをおさえた遊牧族の動向が大きな意味をもっていたといつてよからう。この事情が中國における金銀器製作やその使用の經緯と軌を一にしていること、先年發表したとおりである（注二參照）。傳入した貨幣は、第一群がトルファンに止り、第二群に至って北魏の境域ないしその他にもひろがり、第三群では隋初唐の長安にもあるが、再び傾向は高昌國たるトルファンに集中し、第四群にもこれは及んだのである。このようにして到來した銀貨は、サーサーン朝の本土ないしそれに近い東方域における出土例と全くちがって、都城跡からはほとんど出土せず、壓倒的多數が死者とともに墓に入った。佛塔に金銀貨を埋納することはヒンドゥークシュ南北の地域では普通の現象であり、中國における舍利埋納物たる異方の奇貨もそれを受けたかとおもわれる。したがって、死者とともに墓にいれることだけが東方における顯著な現象と言えよう。その場合、中國においては、女性被葬者と關連してその裝身具ないし身邊の具として副葬した事實を認めてもよいであろう。そうすると、西方の銀貨は河西以西では通貨であつたかもしれないが（よく引用される『隋書』卷二四食貨志）、奇貨として佩用されたことが、また遠東の地におけるサーサーン式銀貨の運命を物語っていることになる。これは同じく傳入したビザンツ金貨にもみられる事實である。以上は公表された一枚一枚に當つて貨幣の同定をおこなつた小結である。もとより未公表資料の公刊をまたねばならない面は多々ある。大方の大方をまつところである。

注

(1)

隋左光祿大夫岐州刺史李公第四女石誌并序

女郎諱靜訓。字小孩。隴西成紀人。上柱國幽州總管「壯公之孫。左光祿大夫敏之第四女也。族纂屬鄉。得「神仙之妙。家榮戚里。被日月之暉。況復淑慧生知。芝「蘭天挺。譽華鬢髮。芳流顰悅。幼爲外祖母周皇太「后所養。訓承長樂。獨見慈撫之恩。教習深宮。彌遵柔「順之德。於是攝心八解。歸依六度戒。珠共明璫並曜。」意花與香佩俱芳。既而繁霜晝下。英芳春落。未登弄「玉之臺。便非澤蘭之天。大業四年六月一日。遘疾終」於汾源之宮。時年九歲。」

皇情軫悼。撤縣輟膳。頻蒙詔旨。禮送還京。贈賻有「加。以其年龍集戊辰十二月己亥朔廿二日庚申。瘞于京兆長安縣休祥里萬善道場之內。卽於墳上構「造重閣。遙追寶塔。欲髣髴於花童。永藏金地。庶留」連於法子。乃爲銘曰。」

(2)

光分婺女。慶合天孫。榮若比秀。采壁同溫。先標令淑。」早習工言。生長宮闈。恩勤撫育。法水成性。戒香增「馥。金牒旦窺。銀函霄讀。往從輿蹕。言屈河汾。珠涓「潤岸。鏡掩輕雲。魂歸祇閣。迹異吳墳。月殿廻風。霜鍾「候曉。砌凝陰雪。擔悲春鳥。共知泡幼。何嗟壽夭。」何家村關係については、桑山「一九五六年來出土の唐代金銀器とその編年」(『史林』第六〇卷第六號、一九七七)、五九、六二、六六頁など。また段鵬琦「西安南郊何家村唐代金銀器小議」(『考古』一九八〇年第六期)は施紋から何家村窖藏が九世紀にまで下ることを論じている。何家村金銀器の全資料の公表が望まれるが、容器たる甕の型式研究はそれにもましてこの窖藏年代をきめる第一等の手がかりである。この検討が主、次に金銀器型式、次に紋様がとりあげられるべきである。

(3)

神德寺舍利塔銘

維大隋仁壽四季歲次甲子四

月丙寅朔八日癸酉

皇帝普爲一切法界幽顯生靈。

□於宜州宜君縣神德寺奉安

舍利。敬造靈塔。願

太祖武元皇帝元明皇太后皇

帝 皇后皇太子諸王子孫等

并內外群官爰及民庶六道三

塗人非人等。生生世世。值佛聞

法。乖離苦因。同昇妙果。

舍利塔下銘

送 舍利大德法師沙門僧暉

『定縣北魏五級佛圖銘』

維大代太和五年歲在辛酉春二月」

興駕東巡狩。次于中山。御新城宮。北幸唐跋路。涇州市。臨」通達而

觀水陸。踐繩術而觀險易。詳眺四曠。悠然興想。」

帝后爰發德音。而詔群臣曰。夫佛法幽深。應召理玄。非夫」觸遇斯因。

在所致興。將何以要福。冥期。取證來果。遂命」有司。以官財願工於

州東之門顯殿之地。造此五級佛圖。」

夏五月廿八日基刹始建。」

二聖乃親發至願。緣此興造之功。願國詐延衰。永享無窮。妙法照隆。

災患不起。時和年豐。百姓安逸。出因入果。常與佛會。與一切臣民六

宮眷屬十方世界六趣衆生。咸同斯福。剋成佛果。乃作讚曰。」

超哉至道。理玄趣廣。福證將來。業傳既往。妙迹悠緬。梵音繼響。」

眞容謝矣。或照靈像。於穆帝后。儀形是欽。爰因遊幸。播此惠心。」

建茲圖寺。寄誠投杙。願因此果。永離昏沈。」

(5)

R. Göhl, *Aufbau der Münzprägung, Zweites Kapitel im Ein asia-tische Stadt*, von F. Altheim u. R. Stiel, Wiesbaden, 1954; Id., *Sasanische Numismatik*, Braunschweig, 1968 (この本稿は筆者がその型式分類のために使用した増訂本である *Sasanian Numismatics*,

1971 のもとになったもの。

- (6) 『新疆出土文物』(北京、一九七五) 一九三圖に六枚のサーサーン銀貨が寫真で示されている。そのうち、上段左はTAM三三八出土、下段左がTAM三〇二、下段中央はTAM一四九出土。下段右は裏だけを示した一枚であり、圈の外を截って丸くした剪邊タイプである。夏鼎氏の表五(報七四)には三枚の剪邊貨幣がある。この三枚中の一枚にこれは相當しよう。上段中央はホスローII世貨であることが判る。しかし、何號墓出土かは不明。上段右はホスローII世のものではなく、アルダシールIII世貨である。低平な冠帽の上に受軸がつき、受軸の兩側に鳥翼がひろがり、受軸の上には球型と三日月がある。この型式の王冠と連珠單圈と星十三日月といった細部要素の組み合わせは、アルダシールIII世(六二八—三〇)貨のもので、これ以外にはないからである。
- (7) R. Curjel, Le trésor du Tépé Maranjan, une trouvaille de monnaies sassanides et kušano-sasanides faite près de Caboul, *Trésors monétaires d'Afghanistan*, par R. Curjel et D. Schlumberger, *Mémoires de la Délégation archéologique française en Afghanistan (MDAFA...略稱)* Tome XIV, Paris, 1953, pp. 101-131, pls. IX-XVI. ㍲㍻㍼㍽㍾㍿㊀㊁㊂㊃㊄㊅㊆㊇㊈㊉㊊㊋㊌㊍㊎㊏㊐㊑㊒㊓㊔㊕㊖㊗㊘㊙㊚㊛㊜㊝㊞㊟㊠㊡㊢㊣㊤㊦㊧㊨㊩㊪㊫㊬㊭㊮㊯㊰㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿
- (8) Sir J. Marshall, *Taxila*, II, pp. 790-91.
- (9) 注8の二九二頁には、M5出土の貨幣数が記されている。ダルマラージカー出土の貨幣分類表には、シャープールII世貨が五七枚とある。シャープールII世貨はまたストウーパN11で一五枚出ているから總計七二枚となる。この枚数はタキシラ出土のシャープールII世貨總枚數六三と合わない。マーシャルの記述にはこのような矛盾がある。だがそれにもまして判らないのは、M5でシャープールII世貨、シャープールIII世貨が多數出土したとする岡崎氏の計算の根據である。
- (10) フォンドキスタンについては、J. Hackin, *Le monastère bouddhique de Fondoukistan* (Fouilles de J. Carl, 1937), *MDAFA*, Tome VIII, Paris, 1959, pp. 49-58. 桑山「大理石エンドラー像はヒンディー王朝のものか」、『アジア文化史論叢』二、一九七八、三六四—六五頁

- (11) 榎一雄「キダーラ王朝の年代について」、『東洋學報』第四一巻第三號、一九五八、一一五—一二頁、山田明爾「キダーラ・クシャーンについて」、『印度學佛教學研究』第一一巻第二號、一九六三、六一—一八頁。
- (12) M. Michner, Some late Kushano-Sassanian and early Hephthalite Silver Coins, *East and West*, N. S. vol. 25, nos. 1-2, 1975, p. 162, fig. 2, 6.
- (13) これらのエフタル貨については、Göbl 1967 に詳しく。
- (14) サーサーン、エフタル、西突厥については次を参考にした。A. Christensen, *L'Iran sous les Sassanides*, Copenhagen, 1944; Th. Nöldeke, *Geschichte der Perser und Araber zur Zeit der Sassaniden, aus der Arabischen Chronik des TABARI*, Leiden, 1879; J. Marguier, *Frankfurt, nach der Geographie des Ps. Moses Korenaci*, Berlin, 1901; R. Ghirshman, *Les Chionites-Hephthalites*, MDAFA, Tome XIII, Le Caire, 1948; Ed. Chavannes, *Documents sur les Tou-Kiue (Turs) Occidentaux*, Paris, 1903; 『隋書』・『舊唐書』・『唐書』の突厥傳および波斯傳。
- (15) 『魏書』卷四上、世祖紀第四上、始光四年六月の條。なお統萬城の現地調査については、『統萬城城址勘測記』(『考古』一九八一年第三期二二—五頁以下)、また『統萬城遺址調査』(『文物參考資料』一九五七年第一〇期、五二頁以下)を参照。
- (16) 注15、太延五年六月甲辰以降参照。
- (17) ならびにその西域傳。また内田吟風「魏書西域傳原文考釋」上(『東洋史研究』第二九卷第一號、一九七〇)、八七一—八八頁。

- (18) 注17内田考釋九二頁參照。
- (19) 『魏書』卷五、高宗紀第五。
- (20) 『魏書』卷八、世宗紀第八。正始四年冬十月辛未の條。
- (21) 『魏書』卷五、高宗紀第五。「太安五年五月居常國遣使朝獻」、および、「和平元年冬十月居常王獻馴象三」。また高祖紀第七上、「太和元年秋九月庚子……車多羅・西天竺・金衛・疊伏羅諸國各遣使朝貢」。榎氏前掲書(注11)、一六頁、四六頁(注38)參照のこと。
- (22) 『舊唐書』卷一九四下、列傳第一四四下、突厥下。「射匱可汗者達頭可汗之孫也。既立後始開土宇。東至金山。西至海。自玉門已西諸國皆役屬之。遂與北突厥爲敵。乃建庭於龜茲北三彌山。……」
- (23) 『隋書』卷八三、列傳第四八、西域、高昌の條の末尾に、「……然伯雅先臣鐵勒。而鐵勒恒遣重臣在高昌。有商胡往來者則稅之。送於鐵勒。……」と。
- (24) 『舊唐書』卷一九九下、列傳一四九下、北狄、鐵勒の條に、「……初大業中西突厥處羅可汗始強大。鐵勒諸部皆臣之。而處羅徵稅無度。薛延陀等諸部皆怨。處羅大怒。誅其酋帥百餘人。鐵勒相率而叛。……西突厥射匱可汗強盛。延陀契苾二部並去可汗之號以臣之。……」
- (25) 嶋崎 昌『隋唐時代の東トルキスタン研究——高昌國史研究を中心として——』一九七七、主篇第六、可汗浮圖城考。
- (26) 『大唐大慈恩寺三藏法師傳』(東方文化學院京都研究所校勘本、卷第二、第八張、「……自此數百里渡縛剡河。至活國。卽葉護可汗長子咀度設名也所居之地。又是高昌王妹嫁。……」。
- (27) 岡崎 敬「サーサーン・ペルシア銀貨とその東傳について」『西南アジア研究』、一四、一九六五、三五、四一頁(岡崎八〇、二五五、二五九頁)。
- (28) 『唐會要』卷七三、安西都護府の條。

資料出典・略 號

- 考五七A 李遇春「新疆吐魯番發現古代銀幣」『考古通訊』一九五七年第三期
- 考五七B 黃河水庫考古工作隊「一九五六年河南陝縣劉家渠漢唐墓群發掘簡報」『考古通訊』一九五七年第四期
- 考五八 趙生琛「青海西寧發現波斯薩珊朝銀幣」『考古通訊』一九五八年第一期
- 考五九A 唐金裕「西安西郊隋李靜訓墓發掘簡報」『考古』一九五九年第九期
- 考五九B 山西文物管理委員會「太原南郊金勝村唐墓」『考古』一九五九年第九期
- 考五九C 李遇春「新疆烏恰縣發現金條和大批波斯銀幣」『考古』一九五九年第九期
- 考六一 廣東省文物管理委員會・華南師範學院歷史系「廣東英德・連陽南齊和隋唐古墓的發掘」『考古』一九六一年第三期
- 考六二 王不考「青海西寧波斯薩珊朝銀幣出土情況」『考古』一九六二年第九期
- 考六六A 夏鼎「新疆吐魯番最近出土的波斯薩珊朝銀幣」『考古』一九六六年第四期
- 考六六B 河北省文化局文物工作隊「河北定縣出土北魏石函」『考古』一九六六年第五期
- 考六六C 夏鼎「河北定縣塔基舍利函中波斯薩珊朝銀幣」『考古』一九六六年第五期
- 考七二 夏鼎「無產階級文化大革命中的考古新發現」『考古』一九七二年第一期
- 考七四 朱捷元・秦波「陝西長安和耀縣發現的波斯薩珊朝銀幣」『考古』一九七四年第二期
- 考七五 內蒙古文物工作隊・內蒙古博物館「呼和浩特市附近出土外國金銀

- 幣」《考古》一九七五年第三期)
- 文六〇A 新疆維吾爾自治區博物館「新疆吐魯番阿斯塔那北區墓葬發掘簡報」《文物》一九六〇年第六期)
- 文六〇B 趙國璧「洛陽發現的波斯薩珊王朝銀幣」《文物》一九六〇年第八・九期)
- 文七二A 陝西省博物館・文管會革委會寫作小組「西安南郊何家村發現唐代窖藏文物」《文物》一九七二年第二期)
- 文七二B 新疆維吾爾自治區博物館「吐魯番阿斯塔那三六三號墓發掘簡報」《文物》一九七二年第二期)
- 文七二C 新疆維吾爾自治區博物館「吐魯番縣阿斯塔那—哈拉和卓古墓群清理簡報」《文物》一九七二年第一期)
- 文七三 新疆維吾爾自治區博物館「吐魯番縣阿斯塔那—哈拉和卓古墓群發掘簡報」《文物》一九七三年第一〇期)
- 文七五 新疆維吾爾自治區博物館・西北大學歷史系考古專業「一九七三年吐魯番阿斯塔那古墓群發掘簡報」《文物》一九七五年第七期)
- 報七四 夏鼐「綜述中國出土的波斯薩珊朝銀幣」《考古學報》一九七四年第一期)
- 專六一 夏鼐『考古學論文集』《考古學專刊》甲種第四號、北京、一九

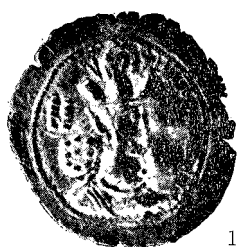
- 六一 中國科學院考古研究所「西安郊區隋唐墓」《中國田野考古報告集》考古學專刊丁種第一八號、北京、一九六六
- 專八〇 中國社會科學院考古研究所「唐長安城郊隋唐墓」《中國田野考古報告集》考古學專刊丁種第二二號、北京、一九八〇
- 黃五四 黃文弼「吐魯番考古記」《考古學特刊》第三號、北京、一九五四
- 黃五八 黃文弼「塔里木盆地考古記」《中國田野考古報告集》考古學專刊丁種第三號、北京、一九五八
- 岡崎八〇 岡崎 敬「増補東西交渉の考古學」東京、一九八〇
- Göbl 1967 R. Göbl, *Dokumente zur Geschichte der Iranischen Hunnen in Baktrien und Indien*, 3 Bd., Wiesbaden, 1967.
- Göbl 1971 R. Göbl, *Sasanian Numismatics*, Braunschweig, 1971.
- Paruck Firdoonjee D. J. Paruck, *Sasanian Coins*, Bombay, 1924.
- Stein Sir Aurel Stein, *Innermost Asia*, 3 Vols., Oxford, 1928.
- Walker John Walker, *A Catalogue of the Arab-Sassanian Coins*, London, 1941.

表2 サーサーン式銀貨の型式別出土量 (圖對照用)

王 名	型式	量	出 土 地	圖番號	王 名	型式	量	出 土 地	圖番號
Shāpūr II	Ia6a	10	(15) 高昌都城跡	1—10	Khusrau II	II 2	1	(19) ヤールホト	67
〃	〃	4	(16) 〃	11—14	〃	〃	1	(20) 〃	68
Ardashir II	I 1	7	(15) 〃	15—21	〃	〃	1	(21) カラホジャ	70
〃	〃	5	(16) 〃	22—26	〃	II 3	1	(3) 西安韓森塞	74
〃	〃	2	(17) 〃	27, 28	〃	〃	1	(4) 西安何家村	73
Shāpūr III	〃	1	(16) 〃	32	〃	〃	6	(5) 長安天子峪	69, 71, 72 75, 76, 78
〃	〃	2	(15) 〃	30, 31	〃	〃	1	(32) アスターナ	79
〃	I 2	1	〃	29	〃	〃	1	(33) 〃	77
Yazdgard II	I 1	2	(10) 河北定縣城	33, 34	〃	〃?	1	(47) カーシュガル	80, (90)
〃	?	1	〃	未公表	〃	II 2	1	(43) アスターナ	未公表
〃 (エフタル)	〃	1	〃	35	〃	II 3	1	(28) 〃	〃
Pirūz	II 1	1	(7) 洛陽邙山	40	〃	〃	1	(29) 〃	〃
〃	II 1?	1	(14) 西寧陸廟街	47	〃	〃	1	(30) 〃	〃
〃	II-?	2	(10) 〃	41, 43	〃	〃	1	(33) 〃	〃
〃	II 3	1	〃	45	〃	〃	1	(35) 〃	〃
〃	〃	3	(14) 〃	48—50	〃	〃	1	(37) 〃	〃
〃	III 1	1	(1) 西安玉祥門外	36	〃	〃	1	(39) 〃	〃
〃	〃	1	(2) 西安張家坡	37	〃	〃	1	(42) 〃	〃
〃	〃	1	(7) 〃	39	〃	〃	1	(44) 〃	〃
〃	〃	1	(12) 廣東英德縣	46	Būrān	I 1	1	(5) 〃	81
〃	〃	3	(14) 〃	51—53	〃	〃	1	(40) アスターナ	未公表
〃	III 3	1	(6) 耀縣寺坪	38	Ardashir III	〃	1	?(トルファン)	82
〃	〃	2	(10) 〃	42, 44	Yazdgard III	〃	1	(26) アスターナ	83
〃	〃	2	(14) 〃	54, 55	〃	II 2	1	(34) 〃	84
〃	II-?	17	(10) 〃	未公表	Yazdgard III式	AS*	1	(26) 〃	85
〃	〃	11	(14) 〃	〃	Khusrau II式	〃	1	(46) クチャ	86
〃	II 3	11	(10) 〃	〃	〃	〃	1	(9) 山西太原	87
〃	III 1	4	〃	〃	〃	〃	5	(47) 〃	81, 91, 92 93, 95
〃	III-?	56	(14) 〃	〃	〃	〃	1	(22) アスターナ	未公表
〃	〃	1	(36) アスターナ	〃	〃	〃	842	(47) 〃	〃
〃	?	10	(7) 〃	〃	仿製貨明	〃	1	(3) 〃	〃
〃	〃	4	(2) 〃	〃	〃	〃	9	(13) 廣東曲江	〃
〃	〃	2	(12) 〃	〃	〃	〃	1	(23) アスターナ	〃
Zāmasp	I 1	1	(41) アスターナ	56	〃	〃	1	(27) 〃	〃
Kavād	II 1	1	(6) 〃	58	〃	〃	1	(29) 〃	〃
〃	III 2	1	(11) フフホト	57	〃	〃	1	(31) 〃	〃
Khusrau I	II 2	3	〃	59—61	〃	〃	1	(18) カラホジャ	〃
〃	〃	1	(6) 〃	62	〃	〃	34	(47) 〃	〃
〃	〃	2	(8) 陝縣會興鎮	63, 64	鏽着	〃	1	(25) アスターナ	〃
Hurmizd IV	I 1	2	(24) アスターナ	65, 66	殘缺	〃	63	(47) 〃	〃
〃	〃	1	(47) カーシュガル	89	〃	〃	〃	〃	〃
〃	?	1	〃	未公表	〃	〃	〃	〃	〃

* アラブ=サーサーン貨





13



14



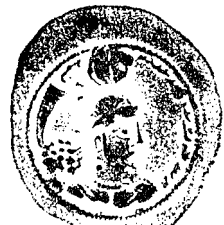
15



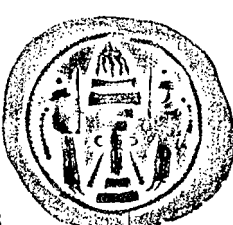
16



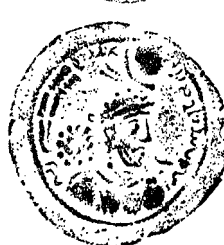
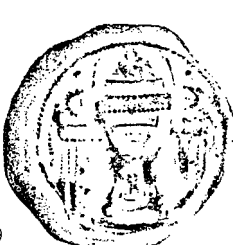
17



18



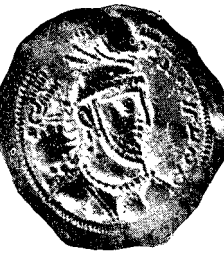
19



20



21



22



23



24

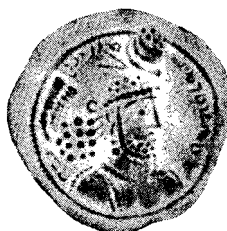




25



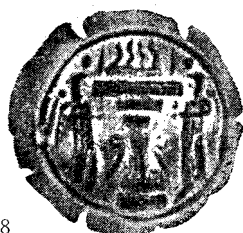
26



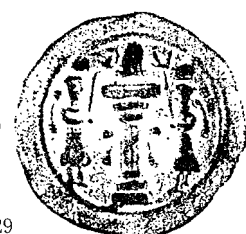
27



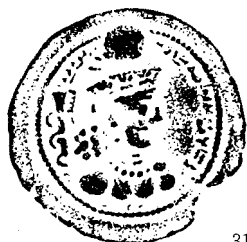
28



29



30



31



32



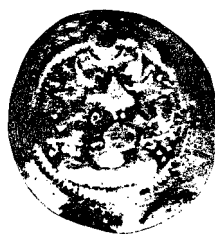
33



34

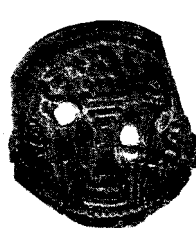
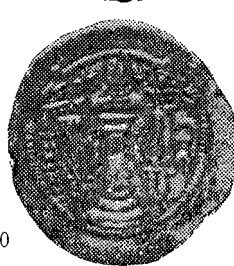
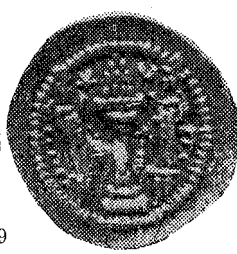
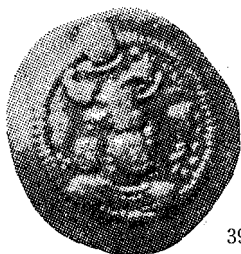


35



36













1-10: Shāpūr II, 型式Ia6a, (出土地 No. 15: 出典考66A); 11-14: Shāpūr II, Ia6a, (No. 16: 考57A); 15-21: Ardashir II, I 1, (No. 15); 22-26: Ardashir II, I 1, (No. 16); 27-28: Ardashir II, I 1, (No. 17: 専61); 29: Shāpūr III, I 2, (No. 15); 30-31: Shāpūr III, I 1, (No. 15); 32: Shāpūr III, I 1, (No. 16); 33-34: Yazdgard II, I 1, (No. 10: 考66B); 35: Yazdgard II 式エフタル貨, (No. 10); 36: Pirūz, III 1, (No. 1: 専80); 37: Pirūz, III 1, (No. 2: 専66); 38: Pirūz, III 3, (No. 6: 考74); 39: Pirūz, III 1, (No. 7: 文60B); 40: Piruz, II 1, (No. 7); 41: Piruz, II, (No. 10); 42: Pirūz, III 3, (No. 10); 43: Pirūz, II, (No. 10); 44: Pirūz, III 3, (No. 10); 45: Pirūz, II 3, (No. 10); 46: Pirūz, III 1, (No. 12: 考61); 47: Pirūz, II 1?, (No. 14: 専61); 48-50: Pirūz, II 3, (No. 14); 51-53: Pirūz, III 1, (No. 14); 54-55: Pirūz, III 3, (No. 14); 56: Zāmasp, I 1, (No. 41: 報74); 57: Kavad I, III 2, (No. 11: 考75); 58: Kavad I, II 1, (No. 6: 考75); 59-61: Khusrau I, II 2, (No. 11); 62: Khusrau I, II 2, (No. 6); 63-64: Khusrau I, II 2, (No. 8: 専61); 65-66: Hormizd IV, I 1, (No. 24: Stein); 67: Khusrau II, II 2, (No. 19: 専61); 68: Khusrau II, II 2, (No. 20: 専61); 69: Khusrau II, II 3, (No. 5: 考74); 70: Khusrau II, II 2, (No. 21: 黄54); 71: Khusrau II, II 3, (No. 5); 72: Khusrau II, II 3, (No. 5); 73: Khusrau II, II 3, (No. 4*); 74: Khusrau II, II 3, (No. 3); 75: Khusrau II, II 3, (No. 5); 76: Khusrau II, II 3, (No. 5); 77: Khusrau II, II 3, (No. 38: 報74); 78: Khusrau II, II 3, (No. 5); 79: Khusrau II, II 3, (No. 32: 考66A); 80: Khusrau II, II 3**, 81: Būrān, I 1, (No. 5); 82: Ardashir III, I 1**, 83: Yazdgard III, I 1, (No. 26: 考66A); 84: Yazdgard III, II 2, (No. 34: 文72A); 85: Yazdgard III 式アラブ=サーサーン貨, (No. 26: 考66A); 86: Khusrau II 式アラブ=サーサーン貨, (No. 46: 黄58); 87: Khusrau II 式アラブ=サーサーン貨, (No. 9: 考59B); 88: Khusrau II 式アラブ=サーサーン貨, (No. 47: 考59C); 89: Hormizd IV, I 1, (No. 47); 90: Khusrau II, II 3, (No. 47); 91-96: Khusrau II 式アラブ=サーサーン貨, (No. 47).